

あのとぎの王子 くん

LE PETIT PRINCE

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ

Antoine de Saint-Exupéry

大久保ゆう訳



あのときの王子くん LE PETIT PRINCE



レオン・ウエルトに

子どものみなさん、ゆるしてください。ぼくはこの本をひとりのおとなのひとにささげます。でもちゃんとしたわけがあるのです。そのおとなのひとは、ぼくのせかいでいちばんの友だちなんです。それにそのひとはなんでもわかるひとで、子どもの本もわかります。しかも、そのひとはいまフランスにいて、

さむいなか、おなかをへらしてくるしんでいます。心のささえが
いるのです。まだいいわけがほしいのなら、このひともまえ
は子どもだったので、ぼくはその子どもにこの本をささげるこ
とにします。おとなはだれでも、もとは子どもですよ。ね。（みん
な、そのことをわすれますけど。）じゃあ、ささげるひとをこう
書きなおしましょう。

（かわいい少年だったころの）

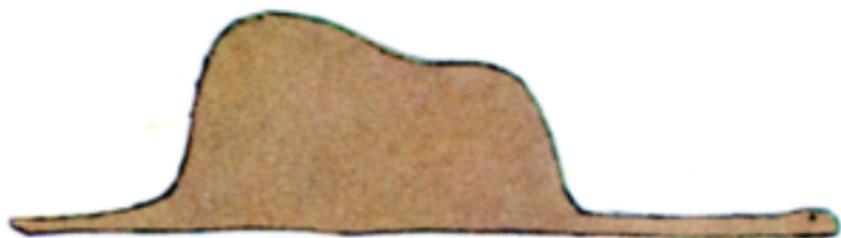
レオン・ウエルトに

ぼくが6つのとき、よんだ本にすばらしい絵があつた。『ぜんぶほんとはなし』という名まえの、しぜんのままの森について書かれた本で、そこに、ボアという大きなヘビがケモノをまゐるのみしようとするところがえがかれていたんだ。だいたいこいう絵だつた。



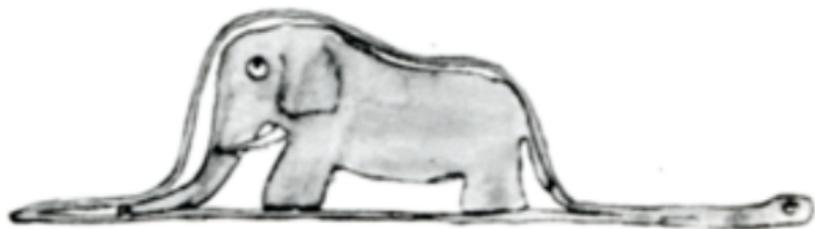
「ボアというヘビは、えものをかまわずにまるのみします。そのあとはじつとおやすみして、6か月かけて、おなかのなかでと かします。」と本には書かれていた。

そこでぼくは、ジャングルではこんなこともおこるんじゃないか、とわくわくして、いろいろかんがえてみた。それから色 えんぴつで、じぶんなりの絵をはじめてかいてやった。さくひ んばんごう1。それはこんなかんじ。



ぼくはこのけつさくをおとなのひとに見せて、こわいでしょ、ときいてまわった。

でもみんな、「どうして、ぼうしがこわいの？」っていうんだ。この絵は、ぼうしなんかじゃなかった。ボアがゾウをおなかのなかでとかしている絵だった。だから、ぼくはボアのなかみをかいて、おとなのひとにもうまくわかるようにした。あのひとたちは、いつもはつきりしてないとだめなんだ。さくひんばんごう2はこんなかんじ。



おとなのひとは、ボアの絵なんてなが見えても見えなくて
もどうでもいい、とにかく、ちりやれきし、さんすうやこくご
のべんきようをしなさいと、ぼくにいいつけた。というわけで、
ぼくは6さいで絵かきになるゆめをあきらめた。さくひんばん
ごう1と2がだめだったから、めげてしまったんだ。おとなの
ひとはじぶんではまったくなにもわからないから、子どもは
くたびれてしまう。いつもいつもはつきりさせなきやいけなく
て。

それでぼくはしぶしぶべつのしごとにきめて、ひこうきのそ
うじゅうをおぼえた。せかいじゅうをちよつととびまわった。
ちりをべんきようして、ほんとやくに立った。ひとめで中国な
のかアリゾナなのかかわかるから、夜なかにとんでまよつても、
かなりたすかるつてもんだ。

こうしてぼくは生きてきて、ちゃんとしたひとたちともおおぜいであつてきた。おとなのひとのなかでくらししてきた。ちかくでも見られた。でもそれでなにかいいことがわかつたわけでもなかつた。

すこしかしこそうなひとを見つけると、ぼくはいつも、とつておきのさくひんばんごうIを見せてみることにしていた。ほんとうのことがわかるひとなのか知りたかつたから。でもかえつてくるのは、きまつて「ぼうしだね。」つて。そういうひとには、ボアのこと、しぜんの森のこと、星のこともしゃべらない。むこうに合わせて、ランプやゴルフ、せいじやネクタイのことをしゃべる。するとおとなのひとは、ものごとがはつきりわかつているひととおちかづきになれて、とてもうれしそつだつた。

それまで、ぼくはずつとひとりぼっちだった。だれともうちとけられないまま、6年まえ、ちよつとおかしくなつて、サハラさばくに下りた。ぼくのエンジンのなかで、なにかがこわれていた。ぼくには、みてくれるひとも、おきやくさんもいなかったから、なおすのはむずかしいけど、ぜんぶひとりでなんとかやつてみることにした。それでぼくのいのちがきまつてしまう。のみ水は、たった7日ぶんしかなかった。

1日めの夜、ぼくはすなの上でねむつた。ひとのすむところは、はるかかなただつた。海のどまんなか、いかだでさまよつ

ているひとよりも、もつとひとりぼっち。だから、ぼくがびつくりしたのも、みんなわかつてくれるとおもう。じつは、あさ日がのぼるころ、ぼくは、ふしぎなかわいいこえでおこされたんだ。

「ごめんください……ヒツジの絵をかいて！」

「えっ？」

「ぼくにヒツジの絵をかいて……」

かみなりにうたれたみたいに、ぼくはとびおきた。目をごしごしこすつて、ぱつちりあげた。すると、へんてこりんなおとこの子がひとり、おもいつめたようすで、ぼくのことをじつと見ている。あとになって、この子のすがたを、わりとうまく絵にかいてみた。でもきつとぼくの絵は、ほんもののみりよくにはかなわない。ぼくがわるいんじゃない。六さいのとき、おとな

のせいで絵かきのゆめをあきらめちゃったから、それからずっと絵にふれたことがないんだ。なかの見えるボアの絵と、なかの見えるボアの絵があるだけ。



それはともかく、いきなりひとが出てきて、ぼくは目をまるくした。なにせひとのすむところのはるかかなたにいたんだから。でも、おとこの子はみちをさがしているようには見えなかった。へとへとも、はらぺこにも、のどがからからにも、びくびくしているようにも見えなかった。ひとのすむところのはるかかなた、さばくのどまんなかで、まい子になっている、そんなかんじはどこにもなかった。

やつとのことで、ぼくはその子にこえをかけた。

「えつと……ここでなにをしてるの？」

すると、その子はちゃんとつたえようと、ゆつくりとくりかえした。

「ごめんください……ヒツジの絵をかいて……」

ものすごくふしぎなのに、だからやってしまうことってある。

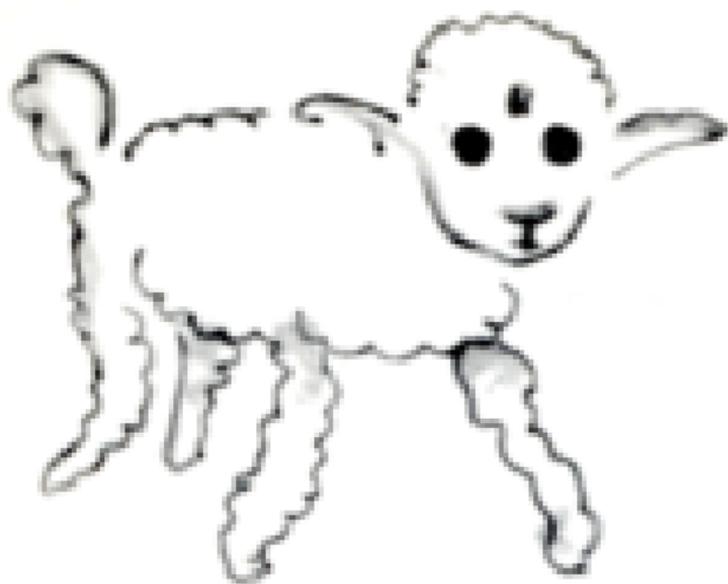
それでなんだかよくわからないけど、ひとのすむところのはるかかなたで死ぬかもしれないのに、ぼくはポケットから1まいのかみとペンをとりだした。でもそういうえば、ぼくはちりやれきし、さんすうやくくぐぐらしいしかならつていないわけなので、ぼくはそのおとこの子に（ちよつとしょんぼりしながら）絵ごころがないんだ、というと、その子はこうこたえた。

「だいじょうぶ。ぼくにヒツジの絵をかいて。」

ヒツジをかいたことがなかったから、やつぱり、ぼくのかけるふたつの絵のうち、ひとつをその子にかいてみせた。なかの见えないボアだった。そのあと、おとこの子のことばをきいて、ぼくはほんとうにびっくりした。

「ちがうよ！ ボアのなかのゾウなんてほしくない。ボアはとつてもあぶないし、ゾウなんてでつかくてじゃまだよ。ぼくんち、

すごくちいさいんだ。ヒツジがいい。ぼくにヒツジをかいて。
なので、ぼくはかいた。



それで、その子は絵をじつとみつめた。

「ちがう！ これもう、びようきじゃないの。もういつかい。」
ぼくはかいてみた。



ぼうやは、しょうがないなあというふうにわらった。

「見てよ……これ、ヒツジじゃない。オヒツジだ。ツノがある
もん……」

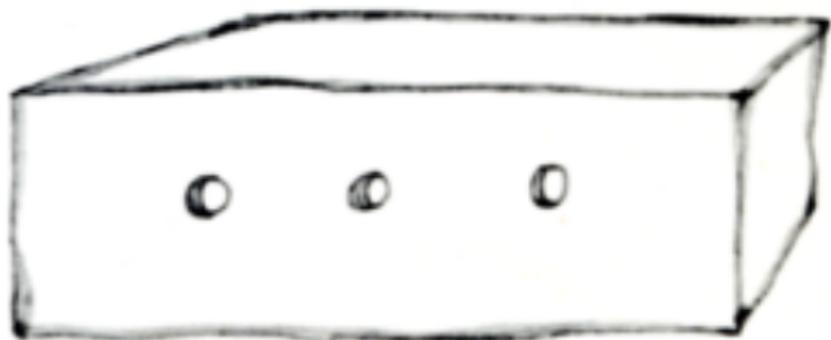
ぼくはまた絵をかきなおした。



「だけど、まえのとおなじで、だめだといわれた。」

「これ、よぼよぼだよ。ほしいのは長生きするヒツジ。」

もうがまんできなかつた。はやくエンジンをばらばらにして
いきたかつたから、さつとこういう絵をかいた。



ぼくはいつてやった。

「ハコ、ね。きみのほしいヒツジはこのなか。」

ところがなんと、この絵を見て、ぼくのちいさなしんさいんくんは目をきらきらさせたんだ。

「そう、ぼくはこういうのがほしかったんだ！ このヒツジ、草いっぱいいるかなあ？」

「なんで？」

「だって、ぼくんち、すぐちいさいんだもん……」

「きつとへいきだよ。あげたのは、すぐちいさなヒツジだから。」

その子は、かおを絵にちかづけた。

「そんなにちいさくないよ……あ！ ねむっちゃった……」

ぼくがあのときの王子くんであったのは、こういうわけな

んだ。



その子がどこから来たのか、なかなかわからなかった。まさに気ままな王子くん、たくさんものをきいてくるわりには、こつちのことにはちつとも耳をかきまない。たまたま口からでたことばから、ちよつとずつ見えてきたんだ。たとえば、ぼくのひこうきをはじめて目にしたとき（ちなみにぼくのひこうきの絵はかかない、ややこしすぎるから）、その子はこうきいてきた。

「このおきもの、なに？」

「これはおきものじゃない。とぶんだ。ひこうきだよ。ぼくのひこうき。」

ぼくはとぶ、これがいえて、かなりとくいげだった。すると、その子は大きなこえでいった。

「へえ！ きみ、空からおつこちたんだ！」

「うん。」と、ぼくはばつがわるそうにいった。

「ぷっ！　へんなの……！」

この気まま王子があまりにからからとわらうので、ぼくはほんとにむかついた。ひどい目にあつたんだから、ちゃんとしたあつかいをされたかった。それから、その子はこうつぶけた。

「なあんだ、きみも空から来たんだ！　どの星にいるの？」

ふと、その子のひみつにふれたような気がして、ぼくはとっさにききかえした。

「それって、きみはどこかべつの星から来たってこと？」

でも、その子はこたえなかった。ぼくのひこうきを見ながら、そつとくびをふった。

「うーん、これだと、あんまりとおくからは来てないか……」

その子はしばらくひとりで、あれこれとぼんやりかんがえていた。そのあとポケットからぼくのヒツジをとりだして、その

たからものをくいいるようにじつと見つめた。

みんなわかつてくれるとおもうけど、その子がちよつとおわせた〈べつの星〉のことが、ぼくはすごく気になった。もつとくわしく知ろうとおもった。

「ぼうやはどこから来たの？　〈ぼくんち〉ってどこ？　ヒツ

ジをどこにもつていくの？」

その子はこたえにつまって、ぼくにこういうことをいった。

「よかった、きみがハコをくれて。よる、おうちがわりになるよね。」

「そうだね。かわいいがるんなら、ひるま、つないでおくためのロープをあげるよ。それと、ながいぼうも。」

でもこのおせつかいは、王子くんのお気にめさなかつたみた

いだ。

「つなぐ？ そんなの、へんなかんがえ！」

「でもつないでおかないと、どこかに行っちゃって、なくしちゃうよ。」

このぼうやは、またからからとわらいだした。

「でも、どこへ行くっていうの！」

「どこへでも。まっすぐまえとか……」

すると、こんどはこの王子くん、おもいつめたようすで、こ
うおっしやる。

「だいじょうぶ、ものすごおくちいきいから、ぼくんち。」

それから、ちよつときみしそうに、こういいそえた。

「まっすぐまえにすすんでも、あんまりとおくへは行けない……」

こうして、だいじなことがもうひとつわかった。なんと、その子のすむ星は、いつけんのいえよりもちよつと大きいだけなんだ！

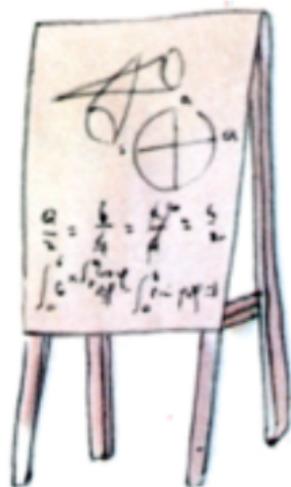


といつても、大げさにいうほどのことでもない。ごぞんじのとおり、ちきゅう、もくせい、かせい、きんせいみたいな名まえのある大きな星のほかに、ぼうえんきょうでもたまにしか見えないちいさなものも、なん100ばいとある。たとえばそういつたものがひとつ、星はかせに見つかると、ばんごうでよばれることになる。〈しょうわくせい 325〉というかんじで。

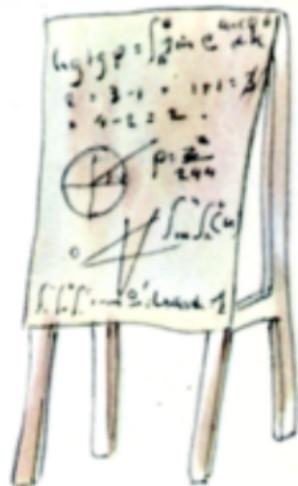
ちゃんとしたわけがあつて、王子くんおすまいの星は、しょうわくせい B612だと、ぼくはおもう。前にも、1909年に、ぼうえんきょうをのぞいていたトルコの星はかせが、その星を見つけている。



それで、せかい星はかせかいぎ、というところで、見つけたことをきちんとはつぴようしたんだけど、みにつけているふくのせいで、しんじてもらえなかつた。おとなのひとつて、いつもこんなふうだ。



でも、しょうわくせい B612 はうんがよくて、そのときのいちばんえらいひとが、みんなにヨーロッパふうのふくをきないと死けいだぞ、というおふれを出した。1920年にそのひとは、おじょうひんなめしもので、はつぴようをやりなおした。するところどは、どこもだれもがうんうんとうなずいた。



こうやって、しょうわくせい B612 のことをいちいちいったり、ばんごうのはなしをしたりするのは、おとなのためなんだ。おとなのひとは、すうじが大すぎだ。このひとたちに、あたらしい友だちができたよといっても、なかみのあることはなにひとつきいてこないだろう。つまり、「その子のこえってどんなこえ？ すきなあそびはなんなの？ チョウチョコはあつめてる？」とはいわずに、「その子いくつ？ なんにんきようだい？ たいじゆうは？ お父さんはどれだけかせぐの？」とかきいてくる。

それでわかったつもりなんだ。おとなのひとに、「すつごい いえ見たよ、ばら色のレンガでね、まどのそばにゼラニウムがあつてね、やねの上にもハトがたくさん……」といったところ、そのひとたちは、ちつともそのいえのことをおもいえがけない。こういわなくちゃ。「IOまんフランのいえを見ました。」

すると「おおすばらしい！」とかいうから。

だから、ぼくがそのひとたちに、「あのときの王子くんがいたっていいきれるのは、あの子にはみりよくがあつて、わらつて、ヒツジをおねだりしたからだ。ヒツジをねだつたんだから、その子がいたっていいきれるじゃないか。」とかいつても、なにいつてるの、と子どもあつかいされてしまう！ でもこういつたらどうだろう。「あの子のすむ星は、しょうわくせいB612だ。」そうしたらなつとくして、もんくのひとつもいわないだろう。おとなつてこんなもんだ。うらんじやいけな。おとなのひとに、子どもはひろい心をもたなくちゃ。

でももちろん、ぼくたちは生きることがなんなのかよくわかつてるから、そう、ばんごうなんて気にしないよね！ できるなら、このおはなしを、ぼくはおとぎばなしふうにはじめたかつ

た。こういえたらよかったのに。

「むかし、気ままな王子くんが、じぶんよりちよつと大きめの星にすんでいました。その子は友だちがほしくて……」生きるつてことをよくわかつているひとには、こつちのほうが、ずつともつともらしいとおもう。

というのも、ぼくの本を、あまりかるがるしくよんでほしくないんだ。このおもいでをはなすのは、とてもしんどいことだ。6年まえ、あのぼうやはヒツジといっしょにいなくなつてしまつた。ここにかこうとするのは、わすれたくないからだ。友だちをわすれるのはつらい。いつでもどこでもだれでも、友だちがいるわけではない。ぼくも、いつ、すうじの大すきなおとなのひとになつてしまふともかぎらない。だからそのためにも、ぼくはえのぐとえんぴつをひとケース、ひさしぶりにかつた。こ

の年でまた絵をかくことにした。さいごに絵をかいたのは、なかの見えないボアとなかの見えるボアをやってみた、六さいのときだ。あたりまえだけど、なるべくそつくりには、あの子のすがたをかくつもりだ。うまくかけるじしんなんて、まったくない。ひとつかけても、もうひとつはぜんぜんだめだとか。大ききもちよつとまちがつてるとか。王子くんがものすごくでかかったり、ものすごくちっちゃかったり。ふくの色もまよつてしまふ。そうやつてあれやこれや、うまくいつたりいかなかつたりしながら、がんばつた。もつとだいじな、こまかいところもまちがつてるとおもう。でもできればおおめに見てほしい。ぼくの友だちは、ひとつもはつきりしたことをいわなかつた。あの子はぼくを、にたものどうしだとおもつていたのかもしれない。でもあいにく、ぼくはハコのなかにヒツジを見ることができな

い。ひよつとすると、ぼくもちよつとおとなのひとなのかもしれない。きつと年をとつたんだ。

5

日に日にだんだんわかつてきた。どんな星で、なぜそこを出るようになったて、どういうたびをしてきたのか。どれも、とりとめなくしゃべっていて、なんとなくそういう話になつたんだけど。そんなふうにして、3日めはバオバブのこわい話をきくことになった。このときもヒツジがきつかけだった。この王子くんはふかいなやみでもあるみたいに、ふいにきいてきたんだ。「ねえ、ほんとなの、ヒツジがちいさな木を食べるっていうの

は。」

「ああ、ほんとだよ。」

「そう！ よかった！」

ヒツジがちいさな木を食べるってことが、どうしてそんなにだいじなのか、ぼくにはわからなかった。でも王子くんはそのままつづける。

「じゃあ、バオバブも食べる？」

ぼくはこの王子くんにおしえてさしあげた。バオバブっていうのはちいさな木じゃなくて、きょうかいのたてもものぐらい大きな木で、そこにゾウのむれをつれてきても、たった一本のバオバブも食べきれやしないんだ、って。

ゾウのむれっていうのを、王子くんはおもしろがって、



「ゾウの上に、またゾウをのせなきや……」

といいつつも、いうことはしつかりいいかえしてきた。

「バオバブも大きくなるまえ、もとは小さいよね。」

「なるほど！ でも、どうしてヒツジにちいさなバオバブを食べてほしいの？」

するとこういうへんじがかえってきた。「え！ わかんないの！」あたりまえだといわんばかりだった。ひとりですいぶんあたまをつかったけど、ようやくどうということなのかなつとくできた。

つまり、王子くんの星も、ほかの星もみんなそうなんだけど、いい草とわるい草がある。とすると、いい草の生えるいいタネと、わるい草のわるいタネがあるわけだ。でもタネは目に見えない。土のなかでひっそりねむっている。おきてもいいかなつ

て気になると、のびていつて、まずはお日さまにむかつて、むじやきでかわいいそのめを、おずおずと出していくんだ。ハツカダイコンやバラのめなら、生えたままにすればいい。でもわるい草や花になると、見つけしだいすぐ、ひっこぬかないといけない。そして、王子くんの星には、おそろしいタネがあつたんだ……それがバオバブのタネ。そいつのために、星のじめんのなかは、めちやくちやになつた。しかも、たつた一本のバオバブでも、手おくれになると、もうどうやつてもとりのぞけない。星じゅうにはびこつて、根つこで星にあなをあけてしまう。それで、もしその星がちいさくて、そこがびつしりバオバブだらけになつてしまえば、星はばくはつしてしまうんだ。

「きつちりしてるかどうかだよ。」というのは、またべつするときの、王子くんのおことば。「あさ、じぶんのみだしなみがおわつ

たら、星のみだしなみもていねいにする。ちいさいときはまぎらわしいけど、バラじゃないってわかったじてんで、バオバブをこまめにひきぬくようにすること。やらなきやいけないのは、めんどろといえばめんどろだけど、かんたんといえばかんたんだよね。」



またある日には、ひとつ、ぼくとこの子どもたちがずっと
わすれないような、りっぱな絵をかいてみないかと、ぼくにも
ちかけてきた。その子はいうんだ。「いつかたびに出たとき、や
くに立つよ。やらなきやいけないことを、のばしのばしにして
ると、ときどきぐあいのわるいことがあるよね。それがバオバ
ブだったら、ぜつたいひどいことになる。こんな星があるんだ、
そこにはなまけものがすんでて、ちいさな木を3本ほうってお
いたんだけど……」

というわけで、ぼくは王子くんのおおせのまま、ここにその星
をかいた。えらそうにいうのはきらいなんだけど、バオバブが
あぶないってことはぜんぜん知られてないし、ひとつの星にい
て、そういうことをかるくかんがえていると、めちやくちやき
けんなことになる。だから、めずらしく、おもいきつていうこ

とにする。いくよ、「子どものみなさん、バオバブに気をつけること！」これは、ぼくの友だちのためでもある。そのひとたちはずっとまえから、すぐそばにきけんがあるのに気がついてない。だからぼくは、ここにこの絵をかきなきやいけない。ここです。いましめるだけのねうちがある。そう、みんなはこんなことをふしぎにおもうかもしれない。「どうしてこの本には、こういう大きくてりっぱな絵が、バオバブの絵だけなんですか？」こたえはとつてもかたん。やつてみたけど、うまくいかなかつた。バオバブをかいたときは、ただもう、すぐにやらなきやつて、いっしょうけんめいだつたんだ。





ねえ、王子くん。こんなふうには、ちよつとずつわかつてきたんだ。きみがさみしく、ささやかに生きてきたって。ずっときみには、おだやかな夕ぐれしか、いやされるものがなかった。このことをはじめて知つたのは、4日めのあさ、そのとき、きみはぼくにいった。

「夕ぐれが大すきなんだ。夕ぐれを見にいこう……」

「でも、またなきや……」

「なにをまつの？」

「夕ぐれをまつんだよ。」

とてもびっくりしてから、きみはじぶんをわらつたのかな。こういったよね。

「てつきりまだ、ぼくんちだとおもつてた！」

なるほど。ごぞんじのとおり、アメリカでまひるのときは、

フランスでは夕ぐれ。だからあつというまにフランスへいけたら、夕ぐれが見られるってことになる。でもあいにく、フランスはめちやくちやとおい。だけど、きみの星では、てくてくとイスをもつてあるけば、それでいい。そうやってきみは、いつでも見たいときに、くれゆくお日さまを見ていたんだ。

「1日に、**△**回も夕ぐれを見たことがあるよ！」

といったすこしあとに、きみはこうつけくわえた。

「そうなんだ……ひとはすつごくせつなくなると、夕ぐれがこいしくなるんだ……」

「その**△△**回ながめた日は、じゃあすつごくせつなかったの？」
「ただこの王子くんは、へんじをなさらなかった。」

5日め、またヒツジのおかげで、この王子くんにまつわるなぞが、ひとつあきらかになった。その子は、なんのまえおきもなく、いきなりきいてきたんだ。ずっとひとりで、うーんとなやんでいたことが、とけたみたいに。

「ヒツジがちいさな木を食べるんなら、花も食べるのかな？」

「ヒツジは目に入ったものみんな食べるよ。」

「花にトゲがあっても？」

「ああ。花にトゲがあっても。」

「じゃあ、トゲはなんのためにあるの？」

わからなかった。そのときぼくは、エンジンのかたくしまつたネジを外そうと、もう手いっぱいだった。しかも気が気でな

かった。どうも、てひどくやられたらしいということがわかってきたし、さいあく、のみ水がなくなることもあるって、ほんとおもえてきたからだ。

「トゲはなんのためにあるの？」

この王子くん、しつもんをいちどはじめたら、ぜったいおやめにならない。ぼくは、ネジでいらいらしていたから、いいかげんにへんじをした。

「トゲなんて、なんのやくにも立たないよ、たんに花がいじわるしたいんだろ！」

「えっ！」

すると、だんまりしてから、その子はうらめしそうにつつかかってきた。

「ウソだ！ 花はかよわくて、むじやきなんだ！ どうにかし

て、ほつとしたいだけなんだ！ トゲがあるから、あぶないんだぞつて、おもいたいだけなんだ……」

ぼくは、なにもいわなかつた。かたわらで、こうかんがえていた。「このネジがここでもうごかないんなら、いつそ、かなづちでふつとぼしてやる。」でも、この王子くんは、またぼくのかんがえをじやまなさつた。

「きみは、ほんとにきみは花が……」

「やめろ！ やめてくれ！ 知るもんか！ いいかげんにいつただけだ。ぼくには、ちゃんとやらなきやいけないことがあるんだよ！」

その子は、ぼくをぽかんと見た。

「ちゃんとやらなきや……」

その子はぼくを見つめた。エンジンに手をかけ、指はふるい

グリスで黒くよごれて、ぶかつこうなおきものの上にかがんで
いる、そんなぼくのことを。

「おとなのひとみたいなの、しゃべりかた！」

ぼくはちよつとはずかしくなつた。でも、ようしやなくこと
ばがつづく。

「きみはとりちがえてる……みんないつしよくたにしてる！」

その子は、ほんきでおこつていた。こがね色のかみの毛が、
風になびいていた。

「まつ赤なおじさんのいる星があつただけけど、そのひとは花の
においもかがないし、星もながめない。ひとをすきになつたこ
ともなくて、たし算のほかはなんにもしたことがないんだ。1
にちじゅう、きみみたいに、くりかえすんだ。『わたしは、ちゃ
んとしたにんげんだ！ ちゃんとしたにんげんなんだ！』それ

で、はなをたかくする。でもそんなの、にんげんじゃない、そんなの、キノコだ！」

「な、なに？」

「キノコ！」

この王子くん、すっかりごりつぶくだ。

「100まん年まえから、花はトゲをもってる。100まん年まえから、ヒツジはそんな花でも食べてしまう。だったらどうして、それをちゃんとわかってしちやいけないわけ？　なんで、ものすごくがんばってまで、そのなんのやくにも立たないトゲを、じぶんのものにしたのかって。ヒツジと花のけんかは、だいじじゃないの？　ふとった赤いおじさんのたし算のほうがちやんとしてて、だいじだっていうの？　たったひとつしかない花、ぼくの星のほかにはどこにもない、ぼくだけの花が、ぼくには

あつて、それに、ちいさなヒツジが1匹きいるだけで、花を食べつくしちゃうこともあるって、しかも、じぶんのしてることもわからずに、あき、ふつとやっちゃうことがあるってわかってたとしても、それでもそれが、だいじじゃないっていうの？」

その子はまっ赤になって、しゃべりつづける。



「だれかが、200まんの星のなかにもふたつとない、どれかいちりんの花をすきになったんなら、そのひとはきつと、星空をながめるだけでしあわせになれる。『あのどこかに、ぼくの花がある……』っておもえるから。でも、もしこのヒツジが、あの花を食べたら、そのひとにとつては、まるで、星ぜんぶが、いきなりなくなつたみたいなんだ！ だから、それはだいじじゃないっていうの、ねえ！」

その子は、もうなにもいえなかつた。いきなり、わあつとなきだした。夜がおちて、ぼくはどうぐを手ばなした。なんだか、どうでもよくなつた。エンジンのことも、ネジのことも、のどのかわきも、死ぬことさえも。ひとつの星、ひとつのわくせい、ぼくのいぼしょ——このちきゅうの上に、ひとりの気ままな王子くんが、いじらしく立っている。ぼくはその子をだきしめ、

ゆつくりとあやした。その子にいった。「きみのすきな花は、なにもあぶなくなんかない……ヒツジにくちわをかいてあげる、きみのヒツジに……花をまもるものもかいてあげる……あと……」
どういっていいのか、ぼくにはよくわからなかった。じぶんは、なんてぶきようなんだろうとおもった。どうやったら、この子と心がかようのか、ぼくにはわからない……すぐくふしぎなところだ、なみだのくについて。

8

ほどなくして、その花のことがどんどんわかっていた。それまでも、王子くんの星には、とてもつつましい花があった。花

びらがひとまわりするだけの、ちつともばしよをとらない花だ。あさ、気がつくど草のなかから生えていて、夜にはなくなっている。でも、あの子のいった花はそれじゃなくて、ある日、どこからカタネがはこばれてきて、めを出したんだ。王子くんはまだかで、そのちいさなめを見つめた。いままで見てきた花のめとは、ぜんぜんちがつていた。またべつのバオバブかもしれない。でも、くきはすぐのびるのをやめて、花になるじゅんぴをはじめた。王子くんは、大きなつぼみがつくのを目のあたりにして、花がひらくときはどんなにすごいだろうと、わくわくした。けれど、その花はみどり色のへやに入っただま、なかなかおめかしをやめなかった。どんな色がいいか、じつくりとえらび、ちまちまとふくをきて、花びらをひとつひとつとのえていく。ひなげしみたいに、しわくちやのまま出たくな

かった。きらきらかがやくくらい、きれいになるまで、花をひらきたくなかった。そうなんだ、その花はとってもおしゃれさんなんだ！ だから、かくれたまま、なん日もなん日も、みじたくをつづけた。ようやく、あるあさ、ちょうどお日さまがのぼるころ、ぱつと花がひらいた。

あまりに気をくばりすぎたからか、その花はあくびをした。

「ふわあ。目がさめたばかりなの……ごめんなさいね……まだ、かみがくしゃくしゃ……」

そのとき、王子くんの口から、おもわずことばがついてでた。「き、きれいだ！」



「そうね。」と花はなにげなくいった。「お日さまといつしよに
さいたもの……」

この花、あまりつつましくもないけど、心がゆきぶられる……
と王子くんはおもった。

そこへすぐ、花のことば。「あきのおしよくじのじかんじやな
くて。このままあたしはほうつておかれるの？」

王子くんは、もうしわけなくなつて、つめたい水のはいった
じょうろをとつてきて、花に水をやった。



こんなちようしで、ちよつとうたぐりぶかく、みえつぱりだったから、その花はすぐに、その子をこまらせるようになった。たとえばある日、花はこの王子くんに、よつつのトゲを見せて、こういった。



「ツメをたてたトラが来たって、へいき。」

「トラなんて、ぼくの星にはいないよ。」と王子くんはいいかえした。「それに、トラは草なんて食べない。」

「あたし、草じゃないんだけど。」と花はなにげなくいった。

「ごめんなさい……。」



「トラなんてこわくないの、ただ、風にあたるのは大つきらい。ついたてでもないのかしら？」

『風にあたるのがきらいって……やれやれ、こまった花だ。』と王子くんはおもった。『この花、とつてもきむずかしいなあ……』



「夜には、ガラスのおおいをかけてちょうだい。あなたのおうち、すつごくくさむい。いごこちわるい。あたしのもといたところろは……」

と、ここで花は話をやめた。花はタネのかたちでやってきた。ほかのところなんて、わかるわけなかった。ついむじやきにウソをいつてしまひそうになつたので、はずかしくなつたけど、花はえへんえへんとせきをして、王子くんのせいになつた。しようとした。

「ついたては……？」

「とりにいこうとしたら、きみがしゃべつたんじゃないか！」
また花は、わざとらしくえへんとやつた。その子におしつけるのは、うしろめたかつたけど。

これだから、王子くんは、まっすぐ花をあひしていたけど、す

ぐしんじられなくなつた。たいしたことのないことばも、ちやんとうけとめたから、すぐくつらくなつていった。

「きいちやいけなかつた。」つて、あるとき、その子はぼくにいった。「花はきくものじゃなくて、ながめて、においをかぐものだつたんだ。ぼくの花は、ぼくの星を、いいにおいにした。でも、それをたのしめばいいつて、わかんなかつた。ツメのはなしにしても、ひどくいらしたけど、気もちをわかつてあげなくちやいけなかつたんだ。」

まだまだはなしはつづいた。

「そのときは、わかんなかつた！　ことばよりも、してくれたことを、見なくちやいけなかつた。あの子は、いいにおいをさせて、ぼくをはれやかにしてくれた。ぼくはぜつたいに、にげちやいけなかつた！　へたなけいさんのうらにも、やさしさが

あつたのに。あの花は、あまのじやくなだけなんだ！でもぼくはわかすぎたから、あいすることつてなんなのか、わかんなかった。」

9

星から出るのに、その子はわたり鳥をつかつたんだとおもう。出る日のあき、じぶんの星のかたづけをした。火のついた火山のススを、ていねいにはらった。そこにはふたつ火のついた火山があつて、あきごはんをあたたためるのにちようどよかつた。それと火のきえた火山もひとつあつただけど、その子がいうには「まんがいち！」のために、その火のきえた火山もおなじ

ようにススをはらった。しつかりススをはらえば、火山の火も、どかんとならず、ちろちろとながつづきする。どかんといいても、えんとつから火が出たくらいの火なんだけど。もちろん、ぼくらのせいかいでは、ぼくらはあんまりちつぽけなので、火山のススはいらない。だから、ぼくらにとって火山つてのはずいぶんやつかいなことをする。



それから、この王子くんはちよつときみしそうに、バオバブのめをひっこぬいた。これがさいご、もうぜつたいにかえつてこないんだ、つて。こういう、まいにちきめてやつてたことが、このあさには、ずつとずつといとおしくおもえた。さいごにもういちどだけ、花に水をやって、ガラスのおおいをかぶせようとしたとき、その子はふいになきたくなつてきた。

「さよなら。」つて、その子は花にいった。

でも花はなにもかえさなかつた。

「さよなら。」つて、もういちどいった。

花はえへんとやつたけど、びょうきのせいではなかつた。

「あたし、バカね。」と、なんとか花がいった。「ゆるしてね。おしあわせに。」

つつかかつてこなかつたので、その子はびつくりした。ガラ

スのおおいをもつたまま、おろおろと、そのばに立ちつくした。どうしておだやかでやさしいのか、わからなかった。

「ううん、すきな。」と花はいつた。「きみがそのことわかんないのは、あたしのせい。どうでもいいか。でも、きみもあたしとおなじで、バカ。おしあわせに。……おおいはそのままにしといて。もう、それだけでいい。」

「でも風が……」

「そんなにひどいびようきじゃないの……夜、ひんやりした空気にあたれば、よくなるとおもう。あたし、花だから。」

「でも虫は……」

「毛虫の1ぴきや2ひき、がまんしなくちゃ。チョウチョとなかよくなるんだから。すぐきれいなんだってね。そうでもないよ、ここにはだれも来ないし。とおくだしね、きみは。大

きな虫でもこわくない。あたしには、ツメがあるから。」

花は、むじやきによつつのトゲを見せた。それからこういった。

「そんなぐずぐずしないで、いらいらしちゃう。行くつてきめたんなら、ほら！」

なぜなら、花はじぶんのなきがおを見られなくなかったんだ。花つてよわみを見せたくないものだから……。



その子は、しょうわくせい 325' 326' 327' 328' 329 や 330 のあたりまでやってきた。知らないこと、やるべきことを見つ
けに、とりあえずよつてみることにした。

さいしよのところは、王さまのすまいだった。王さまは、まっ
赤なおりものとアーミンの白い毛がわをまとつて、あつさりな
がらもでんとしたイスにこしかけていた。

「なんと！ けらいだ。」と、王子くんを見るなり王さまは大ご
えをあげた。

王子くんはふしぎにおもつた。

「どうして、ぼくのことをそうおもうんだらう、はじめてあつ
たのに！」

王さまにかかれば、せかいはとてもあつさりしたものになる。
だれもかれもみんな、けらい。その子は知らなかつたんだ。

「ちこうよれ、よう見たい。」王さまは、やつとだれかに王さまらしくできると、うれしくてたまらなかつた。

王子くんは、どこかにすわろうと、まわりを見た。でも、星は大きな毛がわのすそで、どこもいっぱいだった。その子はしかたなく立ちっぱなし、しかもへとへとだったから、あくびが出た。

「王のまえであくびとは、さほうがなつとらん。」と王さまはいった。「だめであるぞ。」

「がまんなんてできないよ。」と王子くんはめいわくそうにへんじをした。「長たびで、ねてないんだ。」

「ならば、あくびをせよ。ひとのあくびを見るのも、ずいぶんごぶさたであるな、あくびとはこれはそそられる。さあ！ またあくびせよ、いうことをきけ。」

「そんなせまられても……むりだよ……」と王子くんは、かおをまつ赤にした。

「むむむ！ では……こうだ、あるときはあくびをせよ、またあるときは……」

王さまはちよつとつまつて、ごきげんななめ。

なぜなら王さまは、なんでもじぶんのおもいどおりにしたくて、そこからはずれるものは、ゆるせなかつた。いわゆるへぜつたいの王さま[^]つてやつ。でも根はやさしかつたので、ものわりのいいことしか、いいつけなかつた。

王さまにはこんな口ぐせがある。「いいつけるにしても、しようぐんに海鳥になれといって、しようぐんがいうことをきかなかつたら、それはしようぐんのせいではなく、こちらがわるい。」
「すわつていい？」と、王子くんは気まずそうにいった。

「すわるであるぞ。」王さまは毛がわのすそをおごそかにひいて、いいつけた。

でも、王子くんにはよくわからないことがあった。この星はごくごくちーつちやい。王さまはいつたい、なにをおさめてるんだらうか。

「へいか……すいませんが、しつもんが……」

「しつもんをせよ。」と王さまはあわてていった。

「へいかは、なにをおさめてるんですか?」

「すべてである。」と王さまはあたりまえのようにこたえた。

「すべて?」

王さまはそつとゆびを出して、じぶんの星と、ほかのわくせいとか星とか、みんなをさした。

「それが、すべて?」と王子くんはいった。

「それがすべてである……。」と王さまはこたえた。

なぜなら〈ぜったいの王さま〉であるだけでなく、〈うちゅうの王さま〉でもあったからだ。

「なら、星はみんな、いうとおりになるの？」

「むろん。」と王さまはいった。「たちまち、いうとおりになる。それをやぶるものは、ゆるさん。」

あまりにすごい力なので、王子くんはびつくりした。じぶんにもしそれだけの力があれば、4回といわず、72回、いや100回でも、いやいや200回でも、夕ぐれがたった1日のあいだに見られるんじゃないか、しかもイスもうごかさずに！ そう、かんがえたとき、ちよつとせつなくなつた。そういえば、じぶんのちいさな星をすててきたんだつて。だから、おもいきつて王さまにおねがいをしてみた。

「夕ぐれが見たいんです……どうかおねがいます……夕ぐれろって、いつてくください……」

「もし、しょうぐんに花から花へチョウチョみたいにとべ、であるとか、かなしい話を書け、であるとか、海鳥になれ、であるとかいいつけて、しょうぐんが、いわれたことをできなかつたでしょう。なら、そいつか、この王か、どちらがまちがつてると、そちはおもう？」

「王さまのほうです。」と王子くんはきつぱりいった。

「そのとおり。それぞれには、それぞれのできることをまかせねばならぬ。ものごとがわかつて、はじめて力がある。もし、こくみんな海へとびこめといいつけようものなら、国がひっくりかえる。そのようにせよ、といつてもいいのは、そもそも、ものごとをわきまえて、いいつけるからである。」

「じゃあ、ぼくの夕ぐれは？」と王子くんはせまった。なぜなら王子くん、いちどきいたことは、ぜったいにわすれない。

「そちの夕ぐれなら、見られるぞ。いつつけよう。だが、まとう。うまくおさめるためにも、いいころあいになるまでは。」

「それはいつ？」と王子くんはたずねる。

「むむむ！」と王さまはいつて、ぶあついへこよみををしらべた。「むむむ！　そうだな……だい……たい……ごご7じ40ぶんくらいである！　さすれば、いうとおりになるのがわかるだろう。」

王子くんはあくびをした。夕ぐれにあえなくて、ざんねんだつた。それに、ちよつともううんざりだった。

「ここですることは、もうないから。」と王子くんは王さまにいった。「そろそろ行くよ！」

「行つてはならん。」と王さまはいつた。けらいができて、それだけうれしかったんだ。「行つてはならん、そちを、だいじんにしてやるぞ！」

「それで、なにをするの？」

「む……ひとをさばくであるぞ！」

「でも、さばくにしても、ひとがいないよ！」

「それはわからん。まだこの王国をぐるりとまわつてみたことがない。年をとつたし、大きな馬車ばしやをおくばしよもない。あるいてまわるのは、くたびれるんでな。」

「ふうん！ でもぼくはもう見たよ。」と、王子くんはかがんで、もういちど、ちらつと星のむこうがわを見た。「あつちには、ひとつこひとりいない……」

「なら、じぶんをさばくである。」と王さまはこたえた。「もつ

とむずかしいぞ。じぶんをさばくほうが、ひとをさばくよりも、はるかにむずかしい。うまくじぶんをさばくことができたなら、それは、しょうしんしょうめい、けんじやのあかした。」

すると王子くんはいつた。「ぼく、どこにいたって、じぶんをさばけます。ここにすむひつようはありません。」

「むむむ！ たしか、この星のどこかに、よぼよぼのネズミが1ぴきおる。夜、もの音がするからな。そのよぼよぼのネズミをさばけばよい。ときどき、死けいにするのである。そうすれば、そのいのちは、そちのさばきしだいである。だが、いつもゆるしてやることだ、だいじにせねば。1ぴきしかおらんのだ。」

また王子くんはへんじをする。「ぼく、死けいにするのきらいだし、もうさつきと行きたいんです。」

「ならん。」と王さまはいう。

もう、王子くんはいつでも行けたんだけど、年よりの王さまをしょんぼりさせたくなかった。

「もし、へいかが、いうとおりになるのをおのぞみなら、ものわかりのいいことを、いいつけられるはずです。いいつける、ほら、1ふんいないにしゅつぱつせよ、とか。ぼくには、もう、いいころあいなんだとおもいます……」

王さまはなにもいわなかった。王子くんはとりあえず、どうしようかとおもったけど、ためいきをついて、ついに星をあとにした……

「そちを、ほかの星へつかわせるぞ！」そのとき、王さまはあわてて、こういった。

まったくもってえらそうないかただった。

おとなのひとつて、そうとうかわつてるな、と王子くんは心

のなかでおもいつつ、たびはつづく。



ふたつめの星は、みえつぱりのすまいだった。

「ふふん！ ファンのおでましか！」王子くんが見えるなり、みえつぱりはとおくから大ごえをあげた。

というのも、みえつぱりにかかれば、だれもかれもみんなファンなんだ。

「こんにちは。」と王子くんはいった。「へんなぼうしだね。」

「あいさつできる。」と、みえつぱりはいう。「はくしゆされたら、これであいさつする。あいにく、ここをとおりすぎるひとなんていないわけだが。」

「うん？」王子くんは、なんのことかわからなかった。

「りょう手で、ぱちぱちとやってみな。」と、みえつぱりはその子にすすめた。

王子くんは、りょう手でぱちぱちとやった。みえつぱりは、

ぼうしをちよつともち上げて、そつとあいさつをした。

「王さまのところよりもたのしいな。」と王子くんは心のなかでおもった。だからもういちど、りょう手でぽちぽちとやった。みえつぱりも、ぼうしをちよつともち上げて、もういちどあいさつをした。

5 ふんつづけてみたけど、おなじことばかりなので、王子くんはこのあそびにもあきてしまった。

「じゃあ、そのぼうしを下ろすには、どうしたらいいの？」と、その子はきいた。

でも、みえつぱりはきいてなかった。みえつぱりは、ほめことばにしか、ぜつたい耳をかきさない。

「おまえは、おれさまを心のそこから、たたえているか？」と、その男は王子くんにきいた。

「たたえるって、どういうこと？」

「たたえるっていうのは、このおれさまが、この星でいちばんかつこよくて、いちばんおしやれで、いちばん金もちで、いちばんかしこいんだって、みとめることだ。」

「でも、星にはきみしかいないよ！」

「おねがいだ、とにかくおれさまをたたえてくれ！」

「たたえるよ。」といって、王子くんは、かたをちよつとあげた。「でも、きみ、そんなことのどこがだいじなの？」

そして王子くんは、そこをあとにした。

おとなのひとつて、やっぱりそうとうおかしいよ、とだけ、その子は心のなかで思いつつ、たびはつづく。



つぎの星は、のんだくれのすまいだった。ほんのちよつとよつただけなのに、王子くんは、ずいぶん気もちがおちこんでしまった。

「ここでなにしてるの？」王子くんは、のんだくれにいった。その子が見ると、その男は、からのビンひとそろい、なかみのはいったビンひとそろいをまえにして、だんまりすわっていた。

「のんでんだ。」と、のんだくれは、しよんぼりとこたえた。

「なんで、のむの？」と王子くんはたずねた。

「わすれたいんだ。」と、のんだくれはこたえた。

「なにをわすれたいの？」と、王子くんは氣のどくになつてきて、さらにきいた。

「はずかしいのをわすれたい。」と、のんだくれはうつむきながら、うちあげた。

「なにがはずかしいの？」と、王子くんはたすけになりたくて、たずねてみた。

「のむのがはずかしい！」のんだくれは、そういったきり、とうとうだんまりをきめこんだ。

どうしていいかわからず、王子くんは、そこをあとにした。

おとなのひとつて、やっぱりめちやくちやおかしい、とその子は心のなかで思いつつ、たびはつづく。



よつつめの星は、しごとになげんのものだった。このひとは、
とつてもいそがしいので、王子くんが来たときも、かおを上げ
なかった。

「こんにちは。」と、その子はいった。「たばこの火、きえてる
よ。」

「 $3+2=5$ 。 $5+7=12$ 。 $12+3=15$ 。こんにちは。 $15+$
 $7=22$ 。 $22+6=28$ 。火をつけなおすひまなんてない。 $26+$
 $5=31$ 。ふう。ごうけいが、 5 おく 162 まん 2731 。」

「なに、その5おくって。」

「ん？ まだいたのか。5おく……もうわからん……やらなきや
いけないことがたくさんあるんだ！ ちゃんとしてるんだ、わ
たしは。むだ口たたいてるひまはない！ $2+5=7$ ……」

「なんなの、その5おく100まんっていうのは。」また王子く

んはいった。なにがあつても、いちどしつもんをはじめたら、ぜったいにやめない。

しごとにんげんは、かおを上げた。

「54年この星にすんでいるが、気がちつたのは、3どだけだ。さいしよは、あれだ、22年まえのこと、コガネムシがどこからともなく、とびこんできたせいだ。ぶんぶんとうるさくしたから、たし算を4回まちがえた。2どめは、あれだ、11年まえ、リウマチのほつさがおきたせいだ。うんどうぶそくで、あるくひまもない。ちゃんとしてるんだ、わたしは。3どめは……まさにいまだ！ さてと、5おく100……」

「……も、なにがあるの？」

しごとにんげんは、ほつといではもらえないんだと、あきらめた。

「……も、あのちいさいやつがあるんだ。ときどき空に見えるだろ。」

「ハエ？」

「いいや、そのちいさいのは、ひかる。」

「ミツバチ？」

「いいや。そのちいさいのは、こがね色で、なまけものをうつとりさせる。だが、ちゃんとしてるからな、わたしは！ うつとりしてるひまはない。」

「あつ！ 星？」

「そうだ、星だ。」

「じゃあ、5おく100まんの星をどうするの？」

「5おく162まん2731。ちゃんとしてるんだ、わたしは。こまかいんだ。」

「それで、星をどうするの？」

「どうするかって？」

「うん。」

「なにも。じぶんのものにする。」

「星が、きみのもの？」

「そうだ。」

「でも、さつきあった王さまは……」

「王さまは、じぶんのものにしない、〈おさめる〉んだ。ぜんぜんちがう。」

「じゃあ、星がじぶんのものだと、なんのためになるの？」

「ああ、お金もちになれるね。」

「じゃあ、お金もちだと、なんのためになるの？」

「またべつの星が買える、あたらしいのが見つかったら。」

王子くんは心のなかでおもった。『このひと、ちよつとへりくつこねてる。さっきのよつぱらいといっしよだ。』

でもとりあえず、しつもんをつづけた。

「どうやったら、星がじぶんのものになるの？」

「そいつは、だれのものだ？」と、しごとになげんは、ぶつきらぼうにへんじをした。

「わかんない。だれのものでもない。」

「じゃあ、わたしのものだ。さいしよにおもいついたんだから。」
「それでいいの？」

「もちろん。たとえば、きみが、だれのものでもないダイヤを見つけたら、それはきみのものになる。だれのものでもない島を見つけたら、それはきみのもの。さいしよになにかをおもいついたら、〈とつきよ〉がとれる。きみのものだ。だから、わたし

は星をじぶんのものにする。なぜなら、わたしよりさきに、だれひとりも、そんなことをおもいつかなかつたからだ。」

「うん、なるほど。」と王子くんはいった。「で、それをどうするの？」

「とりあつかう。かぞえて、かぞえなおす。」と、しごとになげんはいった。「むずかしいぞ。だが、わたしは、ちゃんとしたにんげんなんだ！」

王子くんは、まだなつとくできなかつた。

「ぼくは、スカーフいちまい、ぼくのものだったら、首のまわりにまきつけて、おでかけする。ぼくは、花が1りん、ぼくのものだったら、花をつんでもっていく。でも、きみ、星はつめないよね！」

「そうだ。だが、ぎんこうにあずけられる。」

「それってどういうこと？」

「じぶんの星のかずを、ちいさな紙きれにかきとめるってことだ。そうしたら、その紙を、ひきだしにしまつて、カギをかける。」

「それだけ？」

「それでいいんだ！」

王子くんはおもつた。『おもしろいし、それなりにかっこいい。でも、ぜんぜんちゃんとしてない！』

王子くんは、ちゃんとしたことについて、おとなのひとと、ちがつたかんがえをもつていたんだ。

「ぼく。」と、その子はことばをつづける。「花がーりん、ぼくのもので、まいにち水をやります。火山がみつつ、ぼくのもので、まいしゅう、ススはらいをします。それに、火がきえてる

のも、ススはらいします。まんがいちがあるから。火山のためにも、花のためにもなってます、ぼくのものにしてるってことが。でも、きみは星のためにはなってます……」

しごとになげんは、口もとをひらいたけど、かえすことばが、みつからなかった。王子くんは、そこをあとにした。

おとなのひとつて、やつぱりただのへんてこりんだ、とだけ、その子は心のなかでおもいつつ、たびはつづく。



いつつめの星は、すぐくふしぎなところだった。ほかのどれよりも、ちいさかった。ほんのぎりぎり、あかりと、あかりつけの入るばしよがあるだけだった。王子くんは、どうやってもわからなかった。空のこんなばしよで、星に家もないし、人もいないのに、あかりとあかりつけがいて、なんのためになるんだろうか。それでも、その子は、心のなかでこうおもった。

『このひとは、ばかばかしいかもしれない。でも、王さま、みえつぱり、しごとになげんやのんだくれなんかよりは、ばかばかしくもない。そうだとしても、このひとのやってることには、いみがある。あかりをつけるつてことは、たとえるなら、星とか花とかが、ひとつあたらしくうまれるつてこと。だから、あかりをけすのは、星とか花をおやすみさせるつてこと。とつてもすてきなおつとめ。すてきだから、ほんとうに、だれかのた

めになる。』

その子は星にちかづく、あかりつけにうやうやしくあいさつをした。

「こんにちは。どうして、いま、あかりをけしたの？」

「しなさいっていわれてるから。」と、あかりつけはこたえた。

「こんにちは。」

「しなさいって、なにを？」

「このあかりをけせつて。こんばんは。」

と、そのひとは、またつけた。

「えっ、どうして、いま、またつけたの？」

「しなさいっていわれてるから。」と、あかりつけはこたえた。

「よくわかんない。」と王子くんはいった。

「わかんなくていいよ。」と、あかりつけはいった。「しなさい

は、しなさいだ。こんにちは。」

と、あかりをけした。

それから、おでこを赤いチェックのハンカチでふいた。

「それこそ、ひどいしごとだよ。むかしは、ものがわかってた。あさけして、夜つける。ひるのあまつたじかんをやすんで、夜のあまつたじかんは、ねる……」

「じゃあ、そのころとは、べつのことをしなさいって？」

「おなじことをしなさいって。」と、あかりつけはいつた。「それがほんつと、ひどい話なんだ！ この星は年々、まわるのがどんどん早くなるのに、おなじことをしなさいって！」

「つまり？」

「つまり、いまでは、1ぷんでひとまわりするから、ぼくにはやすむひまが、すこしもありやしない。1ぷんのあいだに、つ

けたりけしたり！」

「へんなの！ きみんちじゃ、1日が1ふんだなんて！」

「なにがへんだよ。」と、あかりつけがいった。「もう、ぼくらは1か月もいっしょにしやべってるんだ。」

「1か月？」

「そう。30ふん、30日！ こんばんは。」

と、またあかりをつけた。

王子くんは、そのひとのことをじつと見た。しなさいつていわれたことを、こんなにもまじめにやる、このあかりつけのことが、すきになった。その子は、夕ぐれを見たいとき、じぶんからイスをうごかしていたことを、おもいだした。その子は、この友だちをたすけたかった。

「ねえ……やすみたいときに、やすめるコツ、知ってるよ……」

「いつだつてやすみたいよ。」と、あかりつけはいった。

ひとつつていうのは、まじめにやつてても、なまけたいものなんだ。

王子くんは、ことばをつづけた。

「きみの星、ちいさいから、大またならさぽでひとまわりできるよね。ずつと日なたにいられるように、ゆつくりあるくだけでいいんだよ。やすみたくなったら、きみはあるく……すきなぶんだけ、おひるがずつとつづく。」

「そんなの、たいしてかわらないよ。」と、あかりつけはいった。「ぼくがずつとねがつてるのは、ねむることなんだ。」

「こまったね。」と王子くんがいった。

「こまったね。」と、あかりつけもいった。「こんにちは。」と、あかりをけした。

王子くんは、ずっととおくへたびをつづけながら、こんなふうにおもった。『あのひと、ほかのみんなから、ばかにされるだろうな。王さま、みえつぱり、のんだくれ、しごとにんげんから。でも、ぼくからしてみれば、たったひとり、あのひとだけは、へんだとおもわなかった。それっていうのも、もしかすると、あのひとが、じぶんじゃないことのために、あくせくしてたからかも。』

その子は、ざんねんそうにためいきをついて、さらにかんがえる。

『たったひとり、あのひとだけ、ぼくは友だちになれるとおもった。でも、あのひとの星は、ほんとにちいさすぎて、ふたりも入らない……』

ただ、王子くんとしては、そうとおもいたくなかったんだ

けど、じつは、この星のことも、ぎんねんにおもっていたんだ。だって、なんといっても、24じかんに140回も夕ぐれが見られるっていう、めぐまれた星なんだから！



むつつめの星は、なんごぼいもひろい星だった。ぶあつい本をいくつも書いている、おじいさんのすまいだった。

「おや、たんけん家じゃな。」王子くんが見えるなり、そのひとは大ごえをあげた。

王子くんは、つくえの上にししかけて、ちよつといきをついた。もうそれだけたびをしたんだ！

「どこから来たね？」と、おじいさんはいった。

「なあに、そのぶあつい本？」と王子くんはいった。「ここできにしているの？」

「わしは、ちりのはかせじゃ。」と、おじいさんはいった。

「なあに、そのちりのはかせっていうのは？」

「ふむ、海、川、町、山、さばくのあるところをよくしつとる、もの知りのことじゃ。」

「けつこうおもしろそう。」と王子くんはいった。「やつと、ほんもののしごとにあえた！」それからその子は、はかせの星をぐるりと見た。こんなにもでんとした星は、見たことがなかった。

「とつてもみごとですね、あなたの星は。大うなばらは、あるの？」

「まったくもってわからん。」と、はかせはいった。

「えっ！（王子くんは、がっかりした。）じゃあ、山は？」
「まったくもってわからん。」と、はかせはいった。

「じゃあ、町とか川とか、さばくとかは？」

「それも、まったくもってわからん。」と、はかせはいった。

「でも、ちりのはかせなんでしょ！」

「さよう。」と、はかせはいった。「だが、たんけん家ではない。

それに、わしの星にはたんけん家がおらん。ちりのはかせはな、町、川、山、海、大うなばらやさばくをかぞえに行くことはない。はかせというのは、えらいひとだもんで、あるきまわったりはせん。じぶんのつくえを、はなれることはない。そのかわり、たんけん家を、むかえるんじや。はかせは、たんけん家にものをたずね、そのみやげ話をききとる。そやつらの話で、そられるものがあつたら、そこではかせは、そのたんけん家が、しようじきものかどうかをしらべるんじや。」

「どうして？」

「というのな、たんけん家がウソをつくつと、ちりの本はめちやくちやになつてしまふ。のんだくれのたんけん家も、おなじだ。」

「どうして？」と王子くんはいった。

「というのな、よつぱらいは、ものがだぶつて見える。そう

すると、はかせは、ひとつしかないので、ふたつ山があるように、書きとめてしまうからの。」

「たんけん家に、ふむきなひと、ぼく知ってるよ。」と王子くんはいった。

「いるじゃろな。ところで、そのたんけん家が、しょうじきそうだったら、はかせは、なにが見つかったのか、たしかめることになる。」

「見に行くの？」

「いや。それだと、あまりにめんどうじゃ。だから、はかせは、たんけん家に、それをしんじさせるだけのものを出せ、という。たとえば、大きな山を見つけたっていうんであれば、大きな石ころでももってこにやならん。」

はかせは、ふいにわくわくしだした。

「いやはや、きみはとくから来たんだな！ たんけん家だ！ さあ、わしに、きみの星のことをしゃべってくれんか。」

そうやって、はかせはノートをひらいて、えんぴつをけずった。はかせというものは、たんけん家の話をまず、えんぴつで書きとめる。それから、たんけん家が、しんじられるだけのものを出してきたら、やつとインクで書きとめるんだ。

「それで？」と、はかせはたずねた。

「えつと、ぼくんち。」と王子くんはいった。「あんまりおもしろくないし、すぐくちいさいんだ。みつつ火山があつて、ふたつは火がついていて、ひとつはきえてる。でも、まんがいちがあるかもしれない。」

「まんがいちがあるかもしれないな。」と、はかせはいった。

「花もあるよ。」

「わしらは、花については書きとめん。」と、はかせはいった。

「どうしてなの！ いちばんきれいだよ！」

「というのみな、花ははかないんじや。」

「なに、そのへはかない〜って？」

「ちりの本はな、」と、はかせはいう。「すべての本のなかで、いちばんちゃんとしておる。ぜったい古くなったりせんからの。山がうごいたりするなんぞ、めったにない。大うなばらがひあがるなんぞ、めったにない。わしらは、かわらないものを書くんじや。」

「でも、きえた火山が目をさしますかも。」と王子くんはわりこんだ。「なあに、そのへはかない〜って？」

「火山がきえてようと、目ぎめてようと、わしらにとつては、おなじこと。」と、はかせはいった。「わしらにだいじなのは、山

そのものだけじゃ。うごかんからな。」

「でも、そのへはかない」ってなに？」また王子くんはいった。なにがあつても、いちどしつもんをはじめたら、ぜったいにやめない。

「それは、へすぐにきえるおそれがある」ということじゃ。」

「ぼくの花は、すぐにきえるおそれがあるの？」

「むろんじゃ。」

『ぼくの花は、はかない。』と王子くんはおもつた。『それに、まわりからじぶんをまもるのは、よつつのトゲだけ！ それに、ぼくは、ぼくんちに、たったひとつおきざりにしてきたんだ！』その子は、ふいに、やめておけばよかった、とおもつた。でも、気をとりなおして、

「これから行くのに、おすすめの星はありませんか？」と、そ

の子はたずねた。

「ちきゆうという星じゃ。」と、はかせはこたえた。「いいところだときいておる……」

そうして、王子くんは、そこをあとにした。じぶんの花のこを、おもいつつ。

16

そんなわけで、ななつめの星は、ちきゆうだった。

このちきゆうというのは、どこにでもある星なんかじゃない！かぞえてみると、王さまが（もちろん黒いかおの王さまも入れて）IIIにん、ちりのはかせが7000にん、しごとになんげんが

90まんにん、のんだくれが750まんにん、みえつぱりが3おく1100まんにんで、あわせてだいたい20おくのおとなのひとがいる。

ちきゆうの大きさをわかりやすくする、こんな話がある。電でんき気がつかわれるまでは、むつつの大りくひつくるめて、なんと10まん2511にんもの、おおぜいのあかりつけがいなきやならなかつた。

とおくからながめると、たいへん見ものだ。このおおぜいのうごきは、バレエのダンサーみたいに、きちつきちつとしていた。まずはニュージールランドとオーストラリアのあかりつけの出ばんが来る。そこでじぶんのランプをつけると、このひとたちはねむりにつく。するとつきは中国とシベリアのばんが来て、このうごきにくわわって、おわると、うらにひっこむ。それか

らロシアとインドのあかりつけのばんになる。つぎはアフリカとヨーロッパ。それから南アメリカ、それから北アメリカ。しかも、このひとたちは、じぶんの出るじゅんを、ぜったいまちがえない。

でも、北きよくにひとつだけ、南きよくにもひとつだけ、あかりがあるんだけど、そのふたりのあかりつけは、のんべんだらりとしたまいにちをおくっていた。だって、1年に2回はたらくだけでいいんだから。



うまくいおうとして、ちよつとウソをついてしまうつてことがある。あかりつけのことも、ぜんぶありのままつてわけじゃないんだ。そのせいで、なにも知らないひとに、ぼくらの星のことをへんにおしえてしまったかもしれない。ちきゆうのほんのちよつとしか、にんげんのものじゃない。ちきゆうにすんでる20おくのひとに、まっすぐ立つてもらつて、しゅうかい集会たいみたいによりあつまつてもらつたら、わけもなく、たて30キロよこ30キロのひろばにおさまつてしまう。たいへんよう太平洋でいちばんちっちゃい島にだつて、入つてしまふかずだ。

でも、おとなのひとにこんなことをいつても、やっぱりしんじない。いろんなところが、じぶんたちのものだったとおもいたいんだ。じぶんたちはバオバブくらいでつかいものなんだって、かんがえてる。だから、そのひとたちに、「かぞえてみてよ」って、いつてごらん。すうじが大すきだから、きつとうれしがる。でも、みんなはそんなつまらないことで、じかんをつぶさないように。くだらない。みんな、ぼくをしんじて。

王子くんはちきゆうについたんだけど、そのとき、ひとすがつがどこにもなくて、びっくりした。それでもう、星をまちがえたのかなって、あせってきた。すると、すなのなかで、月の色した輪っかが、もそもぞうごいた。

「こんばんは。」と王子くんがとりあえずいつてみると、
「こんばんは。」とへびがいつた。

「ぼく、どの星におつこちたの？」と王子くんがきくと、
「ちきゆうの、アフリカ。」とへビがこたえた。

「えつ、まさか、ちきゆうにはひとがないの？」

「ここは、さばく。さばくに、ひとはいない。ちきゆうは、ひろい。」とへビはいった。

王子くんは石ころにすわって、目を空のほうへやった。

「星がきらきらしてるのは、みんなが、ふとしたときに、じぶんの星を見つけれられるようにするためなのかな。ほら、ぼくの星！ まうえにあるやつ……でも、ほんとにとおいなあ！」

「きれいだ。」とへビはいう。「ここへ、なににしに？」

「花とうまくいってなくて。」と王子くんはいった。

「ふうん。」とへビはいった。

それで、ふたりはだんまり。

「ひとはどこにいるの？」と、しばらくしてから王子くんがきいた。「さばくだと、ちよつとひとりぼっちだし。」

「ひとのなかでも、ひとりぼっちだ。」とへビはいった。

王子くんは、へビをじつと見つめた。



「きみつて、へんないきものだね。」と、しばらくしてから王子くんがいった。「ゆびみたいに、ほつそりしてる……」

「でもおれは、王さまのゆびより、つよい。」とへビはいった。王子くんはにつこりした。

「きみ、そんなにつよくないよ……手も足もなくて……たびだつて、できないよ……」

「おれは船よりも、ずっととおくへ、きみをつれてゆける。」とへビはいった。

へビは王子くんのくるぶしに、ぐるりとまきついた。金のうでわみたいに。

「おれがついたものは、もといいた土にかえる。」と、ことばをつづける。「でも、きみはけがれていない。それに、きみは星から来た……」

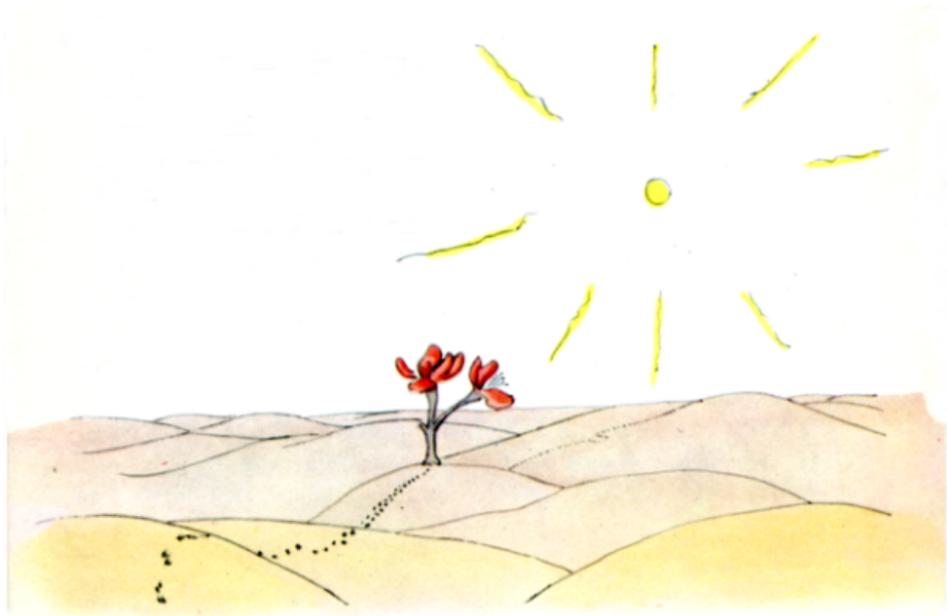
王子くんは、なにもへんじをしなかった。

「きみを見てると、かわいそうになる。このかたい岩でできた
ちきゅうの上で、力もないきみ。おれなら、たすけになれる。
じぶんの星がなつかしくなったら、いつでも。あと……」

「もう！ わかったよ。」と王子くんはいった。「でも、なんで
ずっと、それとなくいうわけ？」

「おれそのものが、それのこたえだ。」とへびはいった。
それで、ふたりはだんまり。

あの子の王子くん LE PETIT PRINCE



王子くんは、さばくをわたつたけど、たつた1りんの花に出くわしたただけだった。花びらがみつっただけの花で、なんのとりえもない花……

「こんにちは。」と王子くんがいうと、

「こんにちは。」と花がいった。

「ひとはどこにいますか？」と、王子くんはていねいにたずねた。

花は、いつだか、ぎょうれつがとおるのを見たことがあった。

「ひと？ いるとおもう。6にんか7にん。なん年かまえに見かけたから。でも、どこであえるか、ぜんぜんわかんない。風まかせだもん。あのひとたち、根っこがないの。それっでずいぶんふべんね。」

「さようなら。」と王子くんがいうと、

「きょうなら。」と花がいった。



王子くんは、たかい山にのぼった。それまでその子の知っていた山といえ、たけがひぎまでしかない火山がみつだけ。しかも、きえた火山はこしかけにつかっていたくらいだ。だから、その子はこんなふうにかんがえた。『こんなたかい山からなら、ひと目で、この星ぜんたいと、ひとみんなを見とおせるはず……』でも、見えたのは、するどくとがった岩山ばかりだった。

「こんにちは。」と、その子がとりあえずいつてみると、

「こんにちは……こんにちは……こんにちは……。」と、やまびこがへんじをする。

「なんて名まえ？」と王子くんがいうと、

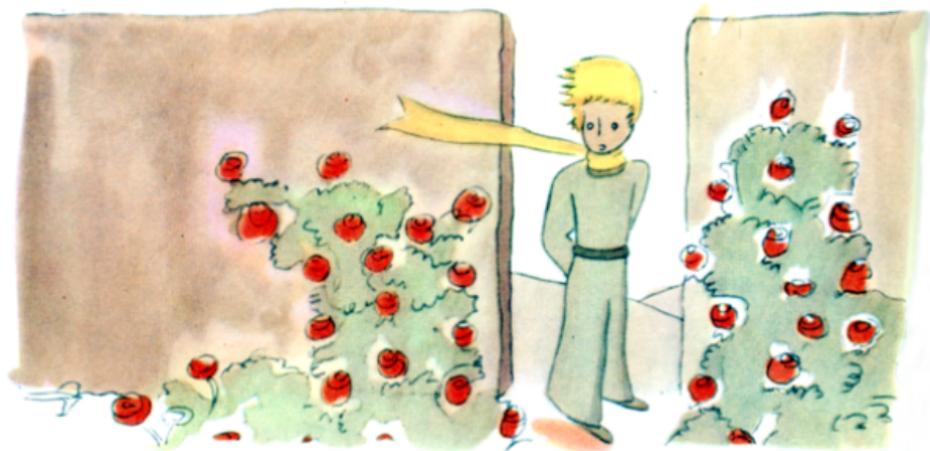
「なんて名まえ……なんて名まえ……なんて名まえ……。」と、やまびこがへんじをする。

「友だちになつてよ、ひとりぼっちなんだ。」と、その子がいうと、

「ひとりぼっち……ひとりぼっち……ひとりぼっち……」と、やまびこがへんじをする。

『もう、へんな星!』と、その子はそのときおもつた。『ここ、かさかさしてるし、とげとげしてるし、ひりひりする。ひとつて、おもいえがく力がないんじゃないの。だれかのいったことをくりかえす……ぼくんちにある花は、いつつもむこうからしゃべりかけてくるのに……』

さて、王子くんが、さばくを、岩山を、雪の上をこえて、ながながとあゆんでいくと、ようやく1本の道に行きついた。そして道をゆけば、すんなりひとのいるところへたどりつく。



「こんにちは。」と、その子はいった。

そこは、バラの花がさきそろう庭にわだった。

「こんにちは。」と、バラがいつせいにこたえた。

王子くんは、たくさんのバラをながめた。みんな、その子の花にそっくりだった。

「きみたち、なんて名まえ？」と、王子くんはほかんとしながら、きいた。

「わたしたち、バラっていうの。」と、バラがいつせいにこたえた。

「えっ！」って、王子くんはいつて……

そのあと、じぶんがみじめにおもえてきた。その子の花は、うちゅうにじぶんとおなじ花なんてないって、その子にしゃべっていた。それがどうだろう、このひとつの庭だけでも、にたよ

うなものがぜんぶで、5000ある！

その子はおもった。『あの子、こんなのを見たら、すねちゃうだろうな……きつと、とんでもないほど、えへんえへんつてやつて、かれたふりして、バカにされないようにするだろうし、そうしたら、ぼくは、手あてをするふりをしなくちゃいけなくなる。だつて、しなけりやあの子、ぼくへのあてつけで、ほんとうにじぶんをからしちゃうよ……』

それからこうもかんがえた。『ひとつしかない花があるから、じぶんはぜいたくなんだとおもつてた。でも、ほんとにあつたのは、ありきたりのバラ。それと、ひぎたけの火山みつつで、そのうちひとつは、たぶん、ずつときえたまま。これじゃあ、りっぱでえらいあるじにはなれない……』そうして、草むらにつつぷして、なみだをながした。



キツネが出てきたのは、そのときだった。

「こんにちは。」とキツネがいった。

「こんにちは。」と王子くんはていねいにへんじをして、ふりかえったけど、なんにもいなかった。

「ここだよ。」と、こえがきこえる。「リンゴの木の下の……」

あの子の王子くん LE PETIT PRINCE



「きみ、だれ？」と王子くんはいった。「とつてもかわいいね……」
「おいら、キツネ。」とキツネはこたえた。

「こつちにきて、いつしよにあそぼうよ。」と王子くんがさそつた。「ぼく、ひどくせつないんだ……」

「いつしよにはあそべない。」とキツネはいった。「おいら、きみになつけられてないもん。」

「あ！ ごめん。」と王子くんはいった。

でも、じつくりかんがえてみて、こうつけくわえた。

「へなつける」って、どういうこと？

「このあたりのひとじゃないね。」とキツネがいった。「なにかさがしてるの？」

「ひとをさがしてる。」と王子くんはいった。「へなつける」って、
どういうこと？」

「ひと。」とキツネがいった。「あいつら、てっぼうをもって、かりをする。いいめいわくだよ！ニワトリもかっているけど、それだけがあいつらのとりえなんだ。ニワトリはさがしてる？」

「ううん。」と王子くんはいった。「友だちをさがしてる。へなつける」って、どういうこと？」

「もうだれもわすれちゃったけど、」とキツネはいう。「へぎずなをつくる」ってことだよ……」

「きずなをつくる？」

「そうなんだ。」とキツネはいう。「おいらにしてみりや、きみはほかのおとこの子」〇まんにと、なんのかわりもない。きみがいなきやダメだつてこともない。きみだつて、おいらがいなきやダメだつてことも、たぶんない。きみにしてみりや、おいらはほかのキツネ」〇まんびきと、なんのかわりもないから。

でも、きみがおいらをなつけたら、おいらたちはおたがい、あいてにいてほしい、つておもうようになる。きみは、おいらにとつて、せかいにひとりだけになる。おいらも、きみにとつて、せかいで1ぴきだけになる……」

「わかつてきた。」と王子くんはいった。「いちりんの花があるんだけど……あの子は、ぼくをなつけたんだとおもう……」

「かもね。」とキツネはいった。「ちきゅうじゃ、どんなことだつておこるから……」

「えっ！　ちきゅうの話じゃないよ。」と王子くんはいった。キツネはとつてもふしぎがった。

「ちがう星の話？」

「うん。」

あのときの王子くん LE PETIT PRINCE



「その星、かりうどはいる？」

「いない。」

「いいねえ！ ニワトリは？」

「いない。」

「そううまくはいかないか。」とキツネはためいきをついた。

さて、キツネはもとの話にもどつて、

「おいらのまいにち、いつもおなじことのくりかえし。おいらはニワトリをおいかけ、ひとはおいらをおいかける。ニワトリはどれもみんなおんなじだし、ひとだってだれもみんなおんなじ。だから、おいら、ちよつとうんざりしてる。でも、きみが
おいらをなつけるんなら、おいらのまいにちは、ひかりがあふれたみたいになる。おいらは、ある足音を、ほかのどんなやつとも聞きわけられるようになる。ほかの音なら、おいら穴ぐらあな

のなかにかくれるけど、きみの音だったら、はやされたみたい
に、穴ぐらからとんででていく。それから、ほら！ あのとこ
うの小むぎばたけ、見える？ おいらはパンをたべないから、
小むぎつてどうでもいいものなんだ。小むぎばたけを見ても、
なんにもかんじない。それつて、なんかせつない！ でも、き
みのかみの毛つて、こがね色。だから、小むぎばたけは、すつ
ごくいいものにかわるんだ、きみがおいらをなついたら、だけ
ど！ 小むぎはこがね色だから、おいらはきみのことを思いだ
すよ。そうやつて、おいらは小むぎにかこまれて、風の音をよ
く聞くようになる……」

キツネはだんまりして、王子くんをじつと見つめて、
「おねがい……おいらをなつけておくれ！」といった。

「よろこんで。」と王子くんはへんじをした。「でもあんまりじ

かんがないんだ。友だちを見つけて、たくさんのことを知らなきやなんない。」

「自分のなつけたものしか、わからないよ。」とキツネはいった。「ひとは、ひまがぜんぜんないから、なんにもわからない。ものうりのところで、できあがったものだけをかうんだ。でも、友だちをうるやつなんて、どこにもいないから、ひとには、友だちつてもものがちつともいない。友だちがほしいなら、おいらをなつけてくれ！」

「なにをすればいいの？」と王子くんはいった。

「気ながにやらなきやいけない。」とキツネはこたえる。「まずは、おいらからちよつとはなれたところにすわる。たとえば、その草むらにね。おいらはきみをよこ目で見て、きみはなにもしやべらない。ことばは、すれちがいのもとなんだ。でも、1

日、一日、ちよつとずつそばにすわつてもいいようになる……」



あくる日、王子くんはまたやつてきた。

「おんなじじかんに、来たほうがいいよ。」とキツネはいった。「そうだね、きみがごこの4じに来るなら、3じにはもう、おいら、うきうきしてくる。それからじかんだんとんすすむと、ますますうきうきしてるおいらがいて、4じになるころには、ただもう、そわそわどきどき。そうやって、おいらは、しあわせをかみしめるんだ！ でも、でたらめなじかんにくるなら、いっつ心をおめかししていいんだか、わからない……きまりごとがあるんだよ。」

「きまりごとって、なに？」と王子くんはいった。

「これだれもわすれちゃったけど、」とキツネはいう。「1日をほかの1日と、1じかンをほかの1じかんと、べつものにしてしまうものことなんだ。たとえば、おいらをねらうかり

うどにも、きまりごとがある。あいつら、木ようは村のむすめとダンスをするんだ。だから、木ようはすつごくいい日！ おいらはブドウばたけまでぶらぶらあるいていく。もし、かりうどがじかんをきめずにダンスしてたら、どの日もみんなおんなじようになつて、おいらの心やすまる日がすこしもなくなる。」

こんなふうにして、王子くんはキツネをなつけた。そして、そろそろ行かなきゃならなくなつた。

「はあ。」とキツネはいつた。「……なみだがでちゃう。」

「きみのせいだよ。」と王子くんはいつた。「ぼくは、つらいのはぜったいいやなんだ。でも、きみは、ぼくになつてほしかつたんでしょ……」

「そうだよ。」とキツネはいつた。

「でも、いまにもなきそうじゃないか！」と王子くんはいった。
「そうだよ。」とキツネはいった。

「じゃあ、きみにはなんのいいこともないじゃない！」

「いいことはあつたよ。」とキツネはいった。「小むぎの色のお
かげで。」

それからこうつぶけた。

「バラの庭に行つてみなよ。きみの花が、せかいにひとつだけつ
てことがわかるはず。おいらにきよならをいいにもどつてきた
ら、ひみつをひとつおしえてあげる。」

王子くんは、またバラの庭に行った。

「きみたちは、ぼくのバラとはちつともにていない。きみたちは、
まだなんでもない。」と、その子はたくさんのバラにいった。
「だれもきみたちをなつけてないし、きみたちもだれひとりなつ

けていない。きみたちは、であったときのぼくのキツネとおんなじ。あの子は、ほかのキツネ「まんびきと、なんのかわりもなかった。でも、ぼくがあの子を友だちにしたから、もういまでは、あの子はせかいにただ1ぴきだけ。」

するとたくさんのバラは、ぼつがわるそうにした。

「きみたちはきれいだけど、からっぽだ。」と、その子はつづける。「きみたちのために死ぬことなんてできない。もちろん、ぼくの花だって、ふつうにとおりすがったひとから見れば、きみたちとおんなじなんだとおもう。でも、あの子はいるだけで、きみたちぜんぶよりも、だいじなんだ。だって、ぼくが水をやったのは、あの子。だって、ぼくがガラスのおおいに入れたのは、あの子。だって、ぼくががついたでまもったのは、あの子。だって、ぼくが毛虫をつぶしてやったのも（2、3びき、チョウチョ

にするためにのこしたけど)、あの子。だって、ぼくが、もんとか、じまんとか、たまにだんまりだってきいてやったのは、あの子なんだ。だって、あの子はぼくのバラなんだもん。」

それから、その子はキツネのところへもどつてきた。

「さようなら。」と、その子がいうと……

「さようなら。」とキツネがいった。「おいらのひみつだけど、すつごくかんたんなことなんだ。心でなくちゃ、よく見えない。もののなかみは、目では見えない、つてこと。」

「もののなかみは、目では見えない。」と、王子くんはもういちどくりかえした。わすれないように。

「バラのためになくしたじかんが、きみのバラをそんなにもだ
いじなものにしたんだ。」

「バラのためになくしたじかん……」と、王子くんはいった。わすれないように。

「ひとは、ほんとのことを、わすれてしまった。」とキツネはいった。「でも、きみはわすれちゃいけない。きみは、じぶんなつけたものに、いつでもなにかをかえさなくちゃいけない。きみは、きみのバラに、なにかをかえすんだ……」

「ぼくは、ぼくのバラになにかをかえす……」と、王子くんはもういちどくりかえした。わすれないように。

「ごんにちは。」と王子くんがいうと、

「こんにちは。」とポイントがかりがいった。

「ここでのなにしてるの？」と王子くんがいうと、

「おきやくを1000にんずつわけてるんだ。」とポイントがかりがいった。「きかんしゃにおきやくがのつてて、そいつをおまえは右だ、おまえは左だつて、やってくんだよ。」

すると、きかんしゃが、ぴかつ、びゅん、かみなりみたいに、ごろごろごろ。ポイントがかりのいるたてものがゆれた。

「ずいぶんいそいでるね。」と王子くんはいった。「なにかさがしてるの？」

「それは、うごかしてるやつだつて、わからんよ。」とポイントがかりはいった。

すると、こんどはぎやくむきに、ぴかつ、びゅん、ごろごろごろ。

「もうもどつてきたの？」と王子くんがきくと……

「おんなじのじゃないよ。」とポイントがかりがいった。「いれかえだ。」

「じぶんのいるところが気にいらないの？」

「ひとは、じぶんのいるところが、ぜったい気にいらないんだ。」とポイントがかりがいった。

すると、またまた、ぴかつ、びゅん、ごろごろごろ。

「さつきのおきやくをおいかけてるの？」と王子くんはきいた。「だれもおっかけてなんかないよ。」とポイントがかりはいった。「なかでねてるか、あくびをしてる。子どもたちだけが、まどガラスに鼻をおしつけてる。」

「子どもだけが、じぶんのさがしものがわかつてるんだね。」と王子くんはいった。「パッチワークのにんぎょうにじかんをなく

して、それがだいじなものになって、だからそれを取りあげたら、ないちゃうんだ……」

「うらやましいよ。」とポイントがかりはいった。

23

「こんにちは。」と、王子くんがいうと、
「こんにちは。」と、ものうりがいった。

ものうりはクスリをうっていた。そのクスリは、のどのからからをおさえるようにできていて、1しゅうかんにひとつぶで、もう、のみたいておもわなくなるんだ。

「どうして、そんなのをうるの？」と王子くんはいった。

「むだなじかんをはぶけるからだ。」と、ものうりはいった。「はかせがかぞえたんだけど、1しゅうかんにぷんもむだがはぶける。」

「そのぷんをどうするの？」

「したいことをするんだ……」

王子くんはかんがえる。『ぼく、ぷんもじゅうになるんなら、ゆつくりゆつくり、水くみ場にあるいていくんだけど……』



おかしくなつて、さばくに下りてから、8日め。ぼくは、ものうりの話をききながら、ほんのすこしだけのこつていた水を、ぐいとのみほした。

「へえ！」と、ぼくは王子くんにいった。「たいへんけつこうな思いで話だけど、まだひこうきがなおつてないし、もう、のむものもない。ぼくも、ゆつくりゆつくり水くみ場にあるいていけると、うれしいんだけど！」

「友だちのキツネが……」と、その子がいったけど、
「いいかい、ぼうや。もうキツネの話をしてるばあいじゃない

んだ！」

「どうして？」

「のどがからからで、もうすぐ死んじゃうんだよ……」

その子は、ぼくのいいぶんがわからなくて、こういった。

「友だちになるっていいことなんだよ、死んじゃうにしても。ぼく、キツネと友だちになれてすつごくうれしくて……」

ぼくはかんがえた。『この子、あぶないってことに気づいてない。はらぺこにも、からからにも、ぜったいならぬんだ。ちよつとお日さまがあれば、それでじゅうぶん……』

ところが、その子はぼくを見つめて、そのかんがえにへんじをしたんだ。

「ぼくだって、のどはからからだよ……井戸いどをさがそう……」

ぼくは、だるそうにからだをうごかした。井戸をさがすなん

て、ぼかばかり。はてもしれない、このさばくで。それなのに、そう、ぼくたちはあるきだした。

ずーっと、だんまりあるいていくと、夜がおちて、星がぴかぴかをはじめた。ぼくは、とろんとしながら、星をながめた。のどがからからで、ぼうつとする。王子くんのことばがうかんで、ぐるぐるまわる。

「じゃあ、きみものどがからから？」と、ぼくはきいた。でも、きいたことにはこたえず、その子はこういっただけだった。

「水は、心にもいいんだよ……」

ぼくは、どういうことかわからなかったけど、なにもいわなかった……きかないほうがいいんだと、よくわかっていた。

その子はへとへとだった。すわりこむ。ぼくもその子のそばにすわりこむ。しーんとしたあと、その子はこうもいった。

「星がきれいなのは、見えない花があるから……」

ぼくはへそうだね」とへんじをして、月のもと、だんまり、すなのでこぼこをながめる。

「さばくは、うつくしい。」と、その子はことばをつづけた……まさに、そのとおりだった。ぼくはいつでも、さばくがこいしかつた。なにも見えない。なにもきこえない。それでも、なにかが、しんとするなかにも、かがやいている……

王子くんはいった。「さばくがうつくしいのは、どこかに井戸をかくしてるから……」

ぼくは、どきつとした。ふいに、なぜ、すながかがやいてるのか、そのなぞがとけたんだ。ぼくが、ちいさなおとこの子だつ

たころ、古いやしきにすんでいた。そのやしきのいいつたえでは、たからものがどこかにかくされていゝらしい。もちろん、だれひとりとして、それを見つけてないし、きつと、さがすひときえいなかつた。でも、そのいいつたえのおかげで、その家まるごと、まほうにかかつたんだ。その家に、かくされたひみつがある。どこか、おくそこに……

「そうか。」と、ぼくは王子くんにいった。「あの家とか、あの星とか、あのさばくが気になるのは、そう、なにかをうつくしくするものは、目に見えないんだ！」

「うれしいよ。」と、その子はいった。「きみも、ぼくのキツネとおなじこといつてる。」

王子くんがねつくと、ぼくはすぐさま、その子をだっこして、またあるきはじめた。ぼくは、むねがいつぱいだつた。なんだ

か、こわれやすいたからものを、はこんでるみたいだ。きつと、これだけこわれやすいものは、ちきゅうのどこにもない、ときえかんじる。ぼくは、月あかりのもと、じつと見た。その子の青白いおでこ、つむった目、風にゆれるふさふさのかみの毛。ぼくはこうおもう。ここで見ているのは、ただのへから。いちぼんだいじなものは、目に見えない……

ちよつとくちびるがあいて、その子がほほえみそうになった。そのとき、ぼくはつづけて、こうかんがえていた。『ねむってる王子くんに、こんなにもぐつとくるのは、この子が花にまつすぐだから。花のすがたが、この子のなかで、ねむってても、ランプのほのおみたく、きらきらしてるから……』そのとき、これこそ、もつともつとこわれやすいものなんだ、って気がついた。この火を、しつかりまもらなくちやいけない。風がびゆん

とふけば、それだけできえてしまう……

そうして、そんなふうにあるくうち、ぼくは井戸を見つけた。
夜あけのことだった。

25

王子くんはいった。「ひとつて、はやいきかんしやにむちゆう
だけど、じぶんのさがしものはわかってない。ということは、
そわそわして、ぐるぐるまわってるだけ。」

さらにつづける。

「そんなことしなくていいのに……」

ぼくたちが行きあたった井戸は、どうもサハラさばくの井戸っ

ぼくはなかつた。さばくの井戸っていうのは、さばくのなかで、かんだんな穴がぼこつとあいてるだけ。ここにあるのは、どうも村の井戸っぽい。でも、村なんてどこにもないし、ぼくは、ゆめかとおもった。

「おかしい。」と、ぼくは王子くんにいった。「みんなそろつてる。くるくる、おけ、ロープ……」

その子はわらつて、ロープを手にとり、くるくるをまわした。するときいきいと音がした。風にごぶさたしてる、かざみどりみたいな音だった。



「きこえるよね。」と王子くんはいった。「ぼくらのおかげで、この井戸がめぎめて、うたをうたってる……」

ぼくは、その子にむりをさせたくなかった。

「かして。」と、ぼくはいった。「きみには、きつすぎる。」

そろりそろり、ぼくは、おけをふちのところまでひっぱり上げて、たおれないよう、しつかりおいた。ぼくの耳では、くるくるがうたいつづけていて、まだゆらゆらしてる水の上では、お日さまがふるえて見えた。

「この水がほしい。」と王子くんがいった。「のませてちょうだい……」

そのとき、ぼくはわかった。その子のさがしものが！

ぼくは、その子の口もとまで、おけをもちあげた。その子は、目をつむりながら、ごくつとのんだ。おいわいの日みたいに、気

もちよかった。その水は、ただののみものとは、まったくべつのものであった。この水があるのは、星空のしたをあるいて、くるくるのうたがあつて、ぼくがうでをふりしぼったからこそなんだ。この水は、心にいい。プレゼントみたいだ。ぼくが、ちいさなおとこの子だったころ。クリスマスツリーがきらきらしてて、夜ミサのおんがくがあつて、みんな気もちよくにここにしていたからこそ、ぼくのもらった、あのクリスマスプレゼントは、あんなふうに、きらきらかがやいていたんだ。

王子くんがいった。「きみんとこのひとは、5000本ものバラをひとつの庭でそだててる……で、さがしものは見つからない……」

「見つからないね。」と、ぼくはうなずく……

「それなのに、さがしものは、なにかーりんのバラとか、ちよつ

この水とかのなかに見つかつたりする……」

「そのとおり。」と、ぼくはうなずく。

王子くんはつづける。

「でも、目じやまつくらだ。心でさがさなくちやいけない。」

ぼくは水をのんだ。しんこきゆうする。さばくは、夜あけで、はちみつ色だった。ぼくもうれしかった、はちみつ色だったから。もう、むりをしなくてもいいんだ……

「ねえ、やくそくをまもつてよ。」と、王子くんはぽつりと言って、もういちど、ぼくのそばにすわった。

「なんのやくそく?」

「ほら……ヒツジのくちわ……ぼくは、花におかえしなくちやなんないんだ!」

ぼくはポケットから、ためしにかいた絵をとりだした。王子くんはそれを見ると、わらいながら、こういった。

「きみのバオバブ、ちよつとキャベツっぽい……」

「えっ！」

バオバブはいいできだとおもっていたのに！

「きみのキツネ……この耳……ちよつとツノっぽい……ながすぎるよ！」

その子は、からからとわらった。

「そんなこといわないでよ、ぼうや。ぼくは、なかの见えないボアと、なかの見えるボアしか、絵つてもものをしらないんだ。」

「ううん、それでいいの。子どもはわかってる。」

そんなわけで、ぼくは、えんぴつでくちわをかいた。それで、その子にあげただけけど、そのとき、なぜだか心がくるしくなっ

た。

「ねえ、ぼくにかくれて、なにかしようとしてる……？」

でも、その子はそれにこたえず、こう、ぼくにいった。

「ほら、ぼく、ちきゅうにおつこちて……あしたで1年になるんだ……」

そのあと、だんまりしてから、

「ここのちかくにおつこちたんだ……」

といつて、かおをまつ赤にした。

そのとき、また、なぜだかわからないけど、へんになさしい気もちになった。それなのに、ぼくはきいてみたくなつたんだ。

「じゃあ、1しゅうかんまえ、ぼくときみがであつたあのあさ、きみがあんなふうに、ひとのすむところのはるかかなた、ひとりつきりであるいていたのは、たまたまじゃないってこと……」

きみは、おつこちたところに、もどつてゐるんだね？」

王子くんは、もつと赤くなつた。

ぼくは、ためらいつつもつづけた。

「もしかして、1年たつたら……？」

王子くんは、またまたまつ赤になつた。しつもんにはこたえなかつたけど、でも、赤くなるつてことは、へうんゝつていつてのとおんなじつてことだから、だから。

「ねえ！」と、ぼくはいつた。「だいじょうぶ……？」

それでも、その子はこたえなかつた。

「きみは、もう、やることをやらなくちやいけない。じぶんのからくりのところへかえらなきやいけない。ぼくは、ここでまつてる。あしたの夜、かえつてきてよ……」

どうしても、ぼくはおちつけなかつた。キツネをおもいだし

たんだ。だれであつても、なづけられたら、ちよつとないてしまうものなのかもしれない……

26

井戸のそばに、こわれた古い石のかべがあつた。つぎの日の夕がた、ぼくがやることをやつてもどつてくると、とおくのほうに、王子くんがそのかべの上にすわつて、足をぶらんとさせているのが見えた。その子のはなしごえもきこえてくる。

「じゃあ、きみはおぼえてないの？」と、その子はいった。「ちがうつて、ここは！」

その子のことばに、なにかがへんじをしているみたいだつた。

「そうだけど！　そう、きょうなんだけど、ちがうんだって、こじやないんだ……」

ぼくは、かべのほうへあるいていった。けれど、なにも見えないし、なにもきこえない。それでも、王子くんはまたことばをかえしていた。

「……そうだよ。さばくについた、ぼくの足あとが、どこからはじまつてるかわかるでしょ。きみはまつだけでいいの。ぼくは、きょうの夜、そこにいるから。」

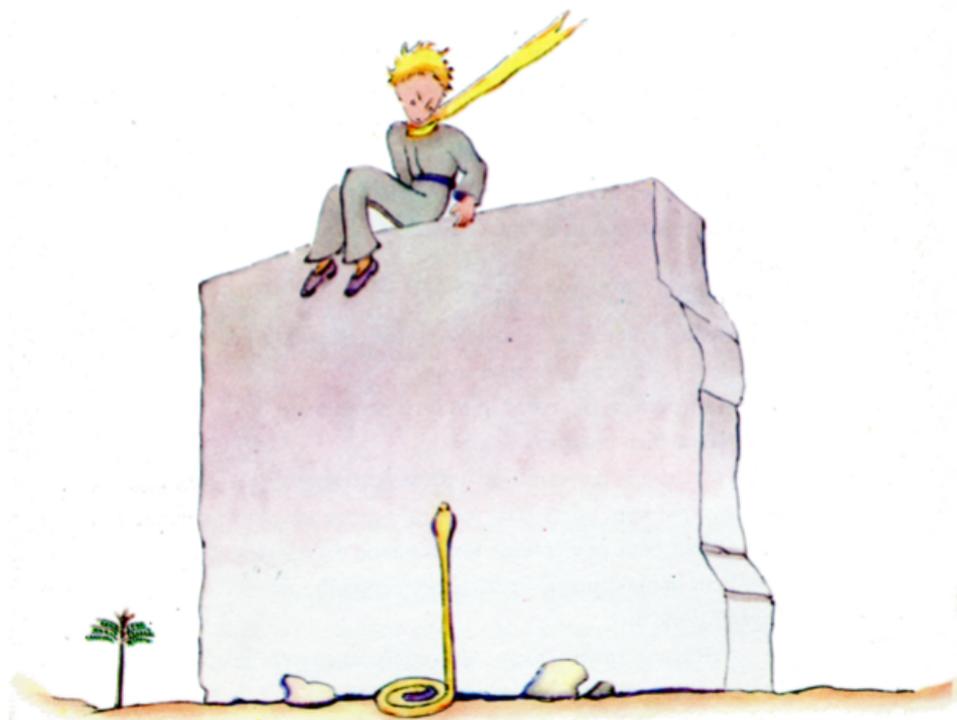
ぼくは、かべから20メートルのところまできたけど、まだなにも見えない。

王子くんは、だんまりしたあと、もういちどいった。

「きみのどくは、だいじょうぶなの？　ほんとに、じわじわくるしまなくてもいいんだよね？」

ぼくは心がぐるしくなつて、たちどまつたけれど、どうしてなのか、やっぱりわからなかつた。

「とにかく、もう行つてよ。」と、その子はいった。「……ぼくは下りたいんだ！」



そのとき、ぼくは気になって、かべの下のあたりをのぞきこんでみた。ぼくは、とびあがった。なんと、そこにいたのは、王子くんのほうへシャーつとかまえている、きいろいへビが1匹き。ひとを30びようでころしてしまいうやつだ。ぼくはピストルをうとうと、けんめいにポケットのなかをさぐりながら、かけ足でむかった。だけど、ぼくのたてた音に気づいて、へビはすなのなかへ、ふんすいがやむみたいに、しゆるしゆるとひっこんでしまった。それから、いそぐようでもなく、石のあいだをカシヤカシヤとかるい音をたてながら、すりぬけていった。ぼくは、なんとかかかべまでいって、かろうじてその子をうけとめた。ぼくのぼうや、ぼくの王子くん。かおが、雪のように青白い。

「いつたいどういうこと！ さつき、きみ、へビとしゃべって

たよね！」

ぼくは、その子のいつもつけているマフラーをほどいた。こめかみをしめらせ、水をのませた。とにかく、ぼくはもうなにもきけなかった。その子は、おもいつめたようすで、ぼくのこをじつと見て、ぼくのくびにすがりついた。その子のしんぞうのどきどきがつたわってくる。てっぼうにうたれて死んでゆく鳥みたいに、よわよわしい。その子はいう。

「うれしいよ、きみは、じぶんのからくりにはたりないものを見つけたんだね。もう、きみんちにかえってゆけるね……」

「どうして、わかるの？」

ぼくは、ちやうど知らせにくるところだった。かんがえてたよりも、やるべきことがうまくいったんだ、つて。

その子は、ぼくのきいたことにはこたえなかったけど、こう

つづけたんだ。

「ぼくもね、きょう、ぼくんちにかえるんだ……」

それから、さみしそうに、

「はるかにずっととおいところ……はるかにずっとむずかしいけど……」

ぼくは、ひしひしとかんじた。なにか、とんでもないことがおころうとしている。ぼくは、その子をぎゅっとだきしめた。ちいさな子どもにするみたい。なのに、それなのに、ぼくには、その子がするつとぬけでて、穴におちてしまうような気がした。ぼくには、それをとめる力もない……

その子は、とおい目で、なにかをちゃんと見ていた。

「きみのヒツジがあるし、ヒツジのためのはこもあるし、くちわもある……」

そういつて、その子は、さみしそうにほほえんだ。

ぼくは、ただじつとしていた。その子のからだは、ちよつとずつほてつていくのがわかった。

「ぼうや、こわいんだね……」

こわいのは、あたりまえなのに！ でも、その子は、そつとわらつて、

「夜になれば、はるかにずつとこわくなる……」

もうどうしようもないんだつておもうと、ぼくはまた、ぞつとした。ぼくは、このわらいごえが、もうぜつたいにきけないなんて、どうしても、うけいれることができなかった。このわらいごえが、ぼくにとつて、さばくのなかの水くみ場のようなものだったんだ。

「ぼうや、ぼくはもつと、きみのわらいごえがききたいよ……」

でも、その子はいった。

「夜がくれば、1年になる。ぼくの星が、ちょうど、1年まえにおっこちたところの上にくるんだ……」

「ぼうや、これはわるいゆめなんだろ？　へビのことも、会うことも、星のことも……」

でも、その子は、ぼくのきいたことにこたえず、こういった。

「だいじなものっていうのは、見えないんだ……」

「そうだね……」

「それは花もおんなじ。きみがどこかの星にある花をすきになったら、夜、空を見るのがこちよくなる。どの星にもみんな、花がさいてるんだ……」

「そうだね……」

「それは水もおんなじ。きみがぼくにのませてくれた水は、ま

るで音楽おんがくみたいだった。くるくるとロープのおかげ……そうでしよ……よかったよね……」

「そうだね……」

「きみは、夜になると、星空をながめる。ぼくんちはちいさすぎるから、どれだかおしえてあげられないんだけど、かえって、そのほうがいいんだ。ぼくの星っていうのは、きみにとつては、あのたくさんのうちのひとつ。だから、どんな星だって、きみは見るのがすきになる……みんなみんな、きみの友だちになる。そうして、ぼくはきみに、おくりものをするんだよ……」

その子は、からからとわらった。

「ねえ、ぼうや、ぼうや。ぼくは、そのわらいごえが大すきなんだ！」

「うん、それがぼくのおくりもの……水とおんなじ……」

「どういうこと？」

「ひとには、みんなそれぞれにとっての星があるんだ。たびび
とには、星は目じるし。ほかのひとにとっては、ほんのちいさ
なあかりにすぎない。あたまのいいひとにとっては、しらべる
ものだし、あのしごとになんげんにとつては、お金のもと。でも、
そういう星だけど、どの星もみんな、なんにもいわない。で、き
みにも、だれともちがう星があるんだよ……」

「どういう、こと？」

「夜、空をながめたとき、そのどれかにぼくがすんでるんだか
ら、そのどれかでぼくがわらつてるんだから、きみにとつては、
まるで星みんながわらつてるみたいになる。きみには、わらつ
てくれる星空があるってこと！」

その子は、からからとわらった。

「だから、きみの心がいえたら（ひとの心はいつかはいえるものだから）、きみは、ぼくとであえてよかつたつておもうよ。きみは、いつでもぼくの友だち。きみは、ぼくといつしよにわらいたくてたまらない。だから、きみはときどき、まどをあける、こんなふうに、たのしくなりたくて……だから、きみの友だちはびつくりするだろうね、じぶんのまえで、きみが空を見ながらわらってるんだもん。そうしたら、きみはこんなふうにいる。『そうだ、星空は、いつだつてぼくをわらわせてくれる！』だから、そのひとたちは、きみのあたまがおかしくなつたとおもう。ぼくはきみに、とつてもたちのわるいいたずらをするつてわけ……」

そして、からからとわらつた。

「星空のかわりに、からからわらう、ちいさなすずを、たくさ

んあげたみたいなんだね……」

からからとわらった。それからまた、ちゃんとしたこえで。

「夜には……だから……来ないで。」

「きみを、ひとりにはしない。」

「ぼく、ぼろぼろに見えるけど……ちよつと死にそうに見えるけど、そういうものなんだ。見に来ないで。そんなことしないでいいから……」

「きみを、ひとりにはしない。」

でも、その子は気になるようだった。

「あのね……ヘビがいるんだよ。きみにかみつくといけないから……ヘビっていうのは、すぐおそいかるから、ほしいままに、かみつくかもしれない……」

「きみを、ひとりにはしない。」

でも、ふつと、その子はおちついて、

「そっか、どくは、またかみつくとときには、もうなくなってるんだ……」

あの夜、ぼくは、あの子がまたあるきはじめてことに気がつかなかった。あの子は、音もなくぬけだしていた。ぼくがなんとかおいつくと、あの子は、わき目もふらず、はや足であるいていた。あの子はただ、こういった。



「あつ、来たんだ……」

それから、あの子はぼくの手をとったんだけど、またなやみだした。

「だめだよ。きみがきずつくだけだよ。ぼくは死んだみたいに見えるけど、ほんとうはそうじゃない……」

ぼくは、なにもいわない。

「わかるよね。とおすぎるんだ。ぼくは、このからだをもつていけないんだ。おもしろいんだ。」

ぼくは、なにもいわない。

「でもそれは、ぬぎすてた、ぬけがらとおんなじ。ぬけがらなら、せつなくはない……」

ぼくは、なにもいわない。

あの子は、ちよつとしずんだ。でもまた、こえをふりしぼつ

た。

「すてきなこと、だよね。ぼくも、星をながめるよ。星はみんな、さびたくるくるのついた井戸なんだ。星はみんな、ぼくに、のむものをそそいでくれる……」

ぼくは、なにもいわない。

「すつごくたのしい！ きみには5おくのすずがあつて、ぼくには5おくの水くみ場がある……」

そしてその子も、なにもいわない。だつて、ないていたんだから……

「ここだよ。ひとりで、あるかせて。」

そういつて、あの子はすわりこんだ。こわかつたんだ。あの子は、こうつづけた。



「わかるよね……ぼくの花に……ぼくは、かえさなきやいけな
いんだ！ それに、あの子はすつごくかよわい！ それに、すつ
ごくむじやき！ まわりからみをまもるのは、つまらない、よつ
つのトゲ……」

ぼくもすわりこんだ。もう立ってはいられなかった。あの子
はいった。

「ただ……それだけ……」

あの子はちよつとためらつて、そのあと立ち上がった。1ぼ
だけ、まえにすすむ。ぼくはうごけなかった。

なにかが、きいろくひかっただけだった。くるぶしのちかく。
あの子のうごきが、いつしゆんだけとまった。こえもなかった。
あの子は、そうつとたおれた。木がたおれるようだった。音さ
えもしなかった。すなのせいだった。



いまとなつては、あれももう、6年まえのこと。……ぼくは、このできごとを、いままでだれにもはなさなかつた。ひこうきなかまは、ぼくのかおをみて、ぶじにかえつてきたことをよろこんでくれた。ぼくは、せつなかつたけど、あいつらには、こういつた。「いやあ、こりこりだよ……」

もういまでは、ぼくの心も、ちよつといえている。その、つまり……まったくつてわけじゃない。でも、ぼくにはよくわかっている。あの子は、じぶんの星にかえつたんだ。だって、夜があけても、あの子のからだは、どこにも見あたらなかつたから。

からだは、そんなにおもくなかつたんだろう……。そして、ぼくは夜、星に耳をかたむけるのがすきになった。5おくのすずとおんなじなんだ……

でも、ほんとに、とんでもないこともおこってしまった。くちわをあ王子くんにかいてあげただけ、ぼくはそれに、かわのひもをかきたすのをわすれていたんだ！ そんなんじやどうやっても、ヒツジをつなぐことはできない。なので、ぼくは、かんがえこんでしまう。『あの子の星では、どういうことになつてるんだらう？ ひよつとして、ヒツジが花をたべてやしないか……』

こうもかんがえる。『あるわけない！ あの王子くんは、じぶんの花をひとばんじゅうガラスおおいのなかにかくして、ヒツジから目をはなさないはずだ……』そうすると、ぼくはしあわ

せになる。そして、星がみんな、そつとわらつてくれる。

また、こうもかんがえる。『ひとつつていうのは、1どや2ど、気がゆるむけど、それがあぶないんだ！ あのと王子くんが夜、ガラスのおおいをわすれてしまつたりとか、ヒツジが夜のうちに、こつそりぬけでたりとか……』そうすると、すずは、すつかりなみだにかわつてしまふ……

すごく、ものすごく、ふしぎなことだ。あのと王子くんが大すきなきみたちにも、そしてぼくにとつても、うちゆうつてものが、ただそのどこかで、どこかしらないところで、ぼくたちのしらないヒツジが、ひとつバラをたべるか、たべないかつてだけで、まつたくべつものになつてしまふんだ……

空を見てみよう。心でかんがえてみよう。『あのヒツジは、あの花をたべたのかな？』そうしたら、きみたちは、まつたくべ

つのものが見えるはずだ……

そして、おとなのひとは、ぜったい、ひとりもわからない。それがすつごくくだいじなんだつてことを！



これは、ぼくにとつて、せかいでいちばんきれいで、いちばんせつないけしきです。さっきのページのものと、おなじけしきなんです。が、きみたちによく見てもらいたいから、もういちどかきます。あのときの王子くんが、ちじょうにあらわれたのは、ここ。それからきえたのも、ここ。

しつかり、このけしきを見てください。もし、いつかきみたちが、アフリカのさばくをたびしたとき、ここがちゃんとわかるように。それと、もし、ここをとおることがあつたら、おねがいですから、たちどまつて、星のしたで、ちよつとまつてほしいんです！ もし、そのとき、ひとりの子どもがきみたちのところへ来て、からからとわらつて、こがね色のかみで、しつもんしてもこたえてくれなかつたら、それがだれだか、わかるはずです。そんなことがあつたら、どうか！ ぼくの、ひどくせ

つないきもちを、どうにかしてください。すぐに、ぼくへ、てがみを書いてください。あの子がかえってきたよ、つて……

青空文庫版『あの子の王子くん』あとがき

1 サン＝テグジュペリと著作権の自由

1944年7月31日、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは飛行機で基地をたつたまま、消息を絶ちました。自殺なのか、

事故なのか、それとも撃墜されたのか。諸説ありますが、本当のことはよくわかっていません。

サン＝テグジュペリは操縦士でありながら、生涯にいくつかの文学作品を残しました。そのなかでも、“Le Petit Prince”、日本では『星の王子さま』の邦題でよく知られている作品は、今にいたるまで世界中の人々から愛されるたぐいまれな本となっています。

日本ではじめて“Le Petit Prince”が翻訳出版されたのは1953年のこと、石井桃子氏のすすめによってフランス文学者の内藤濯氏が訳筆を執り、岩波書店から刊行されました。しかし最初のうちにはあまり注目もされませんでした。ところが、1962年に大型本として出版されてから、児童書としてだけでなく大人向けの本としても読めるという言説が多くなっていき、広い世代

の人々にも読まれるようになっていきます。そして本は売れに売れ、一種の『星の王子さま』ブームのようなものが起こったのです。

それから三十年以上の月日が経ち、サン・テックスの著作権が日本国内で失効することになりました。翻訳というものは、著作権（翻訳権）が有効であれば、一社独占契約なされるのが普通です。ですからそれまで“Le Petit Prince”は、岩波書店だけが翻訳出版できたのです。

——著作権が失効する。

それは本が、本として著者の手を離れ、自由になるということです。社会の公共財産として、芸術作品が還元されていくということでもあります。

それは同時に、翻訳が自由になるということでもあり、とな

ると、どの出版社でも翻訳出版できることになります。あそこまでブームになった本が、ついにどこでも出版できるようになる。そこへ、経営的理由か文学的理由かはわかりませんが、さまざまな出版社が乗り出していくことになります。

“Le Petit Prince”の〈新訳ラッシュ〉ともいえるべき現象が、2005年から2006年にかけて起こりました。サン＝テックスの著作権が切れる前から、どの出版社がやるのか、どんな翻訳者がこの作品に挑むのか、たいへんな話題になりました。この青空文庫版の翻訳が開始された時点では12冊の訳書が流通していましたが、終了した今（2006年10月現在）では15種類も訳が出ています。まだこれからも増えることでしょう。これだけ数が出るとそれぞれ採算がとれるのかどうか心配ですが、自分の読みたい翻訳を選ぶことができるというのは、翻訳の自由の

おかげかもしれません。

ただ、ちよつとした疑問が浮かびます。

——そこにある自由とは、いったい何なのだろうか、と。

確かに翻訳は自由になりました。しかしそれは、フランス語の原典が日本で自由に活用できる、という意味に限ります。日本語訳というテキストが自由になったわけではありません。依然としてそれらは売り物であつて、買い手の自由な使用は認められていません。

自由に朗読することはできません。自由にコピーすることもできません。翻訳されたテキストとは違つて、本来自由であるはずの挿絵さえ、使つてはいけないと主張されてしまうこともあります。

とりわけ、この“Le Petit Prince”は、今までさまざまに制約

に縛られてきました。当時の訳者である内藤濯氏でさえ、その制約とは無縁ではなかったのです。もうそろそろ、自由になってもいいのではないでしょうか。

2 テクストについて

この翻訳は、*Antoine de Saint-Exupéry* “*Le Petit Prince*” の全訳です。1943年にレイナル&ヒツチコック社から刊行されたフランス語版の初版第一刷を底本としています。挿絵もそこからスキャンし、色彩の補正をかけたあと、すべて同じ倍率で縮小してあります。

この初版第一刷は、この『あのときの王子くん』の翻訳活動に関心を寄せていただいた、『星の王子さま』総覧』管理人

RenardBleu 氏の厚意によつて手に入れることができませんでした。また、そのページで公開されていた初版第一刷のテキストがなければ、この翻訳を始めることもなかったでしょう。言葉には表せないほど感謝しております。

さて、話は変わりますが、ここで挿絵について断っておかなければなりません。

挿絵は、その著作者の権利が失効した以上、自由になるべきものです。もし最初に刊行した会社に権利があるとしても、出版から50年以上経過しているので、初版に対する権利はないものと考えられます。

また同時に、これらの挿絵は既存の商標権を侵害するものではありません。

私見ですが、商標権があるから書籍中の挿絵の利用が制限・

管理できる、という考えは、法的にいつてもおかしいと思いません。

もともと〈商標〉は〈他の商品との区別をするための記号・図案〉です。それがほかのものでなくて、どこどこのブランドの商品であることを証明するためのものです。ですから、その有効とする範囲は、本であれば表紙であるとか、題名であるとか、あるいはポスター・広告や看板への使用、商品名、つまり商品の外側につく、あくまでも「付すもの」としての「説明」の部分であると考えられています。

それを本の中身まで適用できるものか、そういった判例が本当に実在しているのかどうか、いささか疑問が残ります。(もちろん、雑誌の中の広告等は別ですが、挿絵がそのようなものでないことは明らかです。)また、商標法における〈使用〉という

のは、商品として提供することですから、そうでない利用の場合、どう制限することができるとか、疑わしいように思います。

商標法においては、その標章の使用によつて、出所表示機能、自他識別機能が発生しているかどうか、また、商品として市場に出回り、経済活動を担っているのかどうか、という点が、裁判の争点になります。

そう考えた場合、商品であるかどうかは別として、少なくとも、

「本の中身の挿絵は、出所表示機能・自他識別機能を有しない。よつて、商標としての使用行為に当たらない。」

と、明確に言えるのではないかと思えます。

3 朗読について

この翻訳は、翻訳者に許可を得ることなく、自由に朗読することができません。朗読の際、自然に出てくる言い換えなども、していただきつてまったく構いません。（つまり、訳者が細かいことをいうことはありません。）

たとえば、この翻訳では会話を多く、以下のようにしています。

「○○××」と、△△はいった。「■ ■ ◆ ◆」!

それを、朗読に必要な範囲内で、このように読み替えてくださっても結構です。

「○○××。 ■■◆◆！」と、△△はいった。

「○○××。 ■■◆◆！」（台詞のみで以下を省略する）

どちらの方がよく読めるかどうか、そのあたりは、朗読者のご配慮や感性におまかせいたします。

——と、このような注記をつけるのにも、理由があります。そもそもこの翻訳の企画が、朗読のために始められたからです。

佐々木健氏は、プロの声優ナレーターであり、また STORY-TELLERBOOK (<http://storytellerbook.cocolog-nifty.com/blog/>) というブログで朗読ポッドキャストイングをやっておられます。あるとき、青空文庫で公開されていた拙訳の『はだかの王さま』を朗読してくださり、それがご縁でメールを交わす仲となりました。

ちようどそのとき、私は次に翻訳する作品をどれにしようかと悩んでいて、その候補のなかに“Le Petit Prince”があつたのですが、なかなかどれに決めるといふ踏ん切りがつきませんでした。

そこへ舞い込んできたのが、佐々木氏のメールです。——『はだかの王さま』や『赤毛連盟』のように、無料で公開されていて自由に読める『星の王子さま』はないでしょうか?——と、そう尋ねられたとき、ここはひとつ、自分でやってみよう、内藤濯氏に挑戦してみよう、と覚悟を決めたのです。

1953年に出版された内藤濯「訳」は、その訳者本人が何度か言及なさっているように、まさに〈朗読〉のために作られた翻訳でした。内藤氏は「まず声の言葉あつての文字の言葉である」といふ言語観をもつておられて、〈言葉の呼吸〉やへいのちある

言葉〉を重要視しておられました。『星の王子さま』という作品の〈ねうち〉は「声を通して読む」ことにあるとお考えになっていたようです。実際、あの翻訳は口述で作られていて（健康上の理由もあつたようですが）、原文と訳文を比べながら、できるだけリズムに注意していくども推敲されています。詠む対象とひとつになるといのが、内藤さんが文芸作品に挑む際に用いる〈哲学〉であり、その意味では、あの翻訳は内藤さんの身体からダイナミックに吐き出された翻訳だったように思います。

この『あのときの王子くん』も、佐々木氏という朗読者がそこにいらつしやる以上、何よりもまず〈読むテキスト〉として、〈語るテキスト〉として織られています。その意味では、内藤氏に挑戦するということになります。この挑戦には、また別の項で語るように、別の意図もあるのですが、果たしてその挑戦が

うまくいったかどうか、私に判断することはできません。読者のみなさんのご判断を待つばかりです。

4 翻訳について

前項でも書いたように、この翻訳は朗読のために作られています。そのため、文体は読むに適したものでなければなりません。また、フランス語では8歳ほどの子どもなら、ただ読むことは何の支障もないというふうにも聞いております。そうであるなら、翻訳の文体も、日本の同じ年齢の子どもが読んだり、聞いたりすることのできるような文体にする必要があります。

とりわけ、語彙には注意しなくてはなりません。小さい子どもでも、目でわかり聞いてわかる言葉。この翻訳では、できる

だけ漢語や熟語を廃し、やまと言葉を使うようにしました。しかし、その言葉がやさしいからと言って、内容を簡単にしたということではありません。私は、むずかしい内容だからむずかしい言葉でなければならぬ、というふうには思いません。特に、この“Le Petit Prince”がそうであるように、たとえやさしい言葉で書かれていても、むずかしいことというのは存在します。ですから、私はたとえこの作品の内容が大人向けであっても、言葉の上ではやさしくある以上は、やさしい言葉で訳そうと思います。

平易な言葉を選びつつ、読みやすい文章になるよう心がけました。ときに意味より、リズムや音楽性を優先した部分もあります。そしてなおかつ、もうひとつ文体について配慮した点があります。それは、文章の長さです。

一般に、欧米の書物を日本語に翻訳すると、原典の1.5倍になるというふうに言われます。しかし、この意見に私は納得できません。そのような訳文は、ときに語りすぎの場合が多いからです。

なぜなら翻訳というのは、こなれた日本語を意識しすぎると、わかりやすい文、わかる文が必要であるというふうに思い始めます。それは悪いことではないのですが、原典には余計な説明を付して、文章を膨らませてしまうこともあります。たとえば、原文では一度しか使っていない動詞を反復してみたり、または何でもないとこころに凝った表現を使ってみたり。あるいは単純に、一言の台詞なのに、長々と語ったりする。もしこれが吹き替え翻訳であれば、すぐに尺が合わなくなるでしょう。

そこでこの翻訳では、原文の長さにできるだけ配慮して、訳

文が同じくらしいの長さになるよう作られています。それは原文へ可能な限り近づきたいという欲求であると同時に、自分が作品について語りすぎることを抑えるための枷でもあります。

翻訳者に限らず、人はわかっていることをすべて語ろうとします。“Le Petit Prince”であれば、その作品についてわかつていることを、その作品について読み込んだことを、翻訳にすべて出したくなってくるのです。しかし、そのなかには作品に書いてないことも含まれています。それをすべて書けば、また元の作品とは変わってくるでしょう。そういったことは、翻訳ではなく研究書や別の文章として書くべきものであり、翻訳に書き込むものではありません。原文に書いてあることを書き、書かれていないことは書かない、というのが原則であるように思います。

文体をうまく制御し、自分を律することが、翻訳には必要です。どのような条件で、どのような相手に向かって書くのか。そういった指定のようなものが、翻訳には欠かせません。まず書くべきところを抽象し、そうでないところを捨象する。つまり書くべきでないところを想定し、その場所を消去するのです。そしてそのあとに残ったちいさな場所に向かって、精神を統一して訳出していく。こういう厳密な指定を意識しなければ、たちまち翻訳のエクリチュールはぼろぼろに崩れていくことでしよう。

5 脱〈内藤「訳」〉

この訳は、さまざまな点で、すでにある内藤濯氏の訳から抜

け出ることを試みています。私は、この作品がファンタジーであるとは思いませんし、また『星の王子さま』という題名を冠されるような作品であるとは考えていません。新訳である以上は、前のものに追従するのではなく、それを壊し、乗り越えることを考えねばなりません。

そのため、この翻訳の訳文には、内藤「訳」のファンの方々には、我慢ならないような点がいくつもあるかもしれません。たとえば、キツネが教えてくれる秘密がそうです。この翻訳では、次のような訳文になっています。

「おいらのひみつだけど、すつごくかんたんなことなんだ。心でなくちゃ、よく見えない。もののなかみは、目では見えない、つてこと。」

内藤「訳」でこの部分は「かんじんなことは、目に見えない」となっています。もしくははのちの方に出てくる「たいせつなことは、目に見えない」で覚えておられる方もおられるかもしれませんが、ここは原文では「本質的なもの」を意味する“l'essential”が取られています。単純に訳すのであれば、「本質、もと、たま、核、芯」などの訳語が考えられますが、あえて日本語で「実質」という意味も持つ「なかみ」という和語を取りました。ここは「たいせつ」よりは「かんじん」の方が優れていると思います。いかんせん言葉が古く、「そのものの存在にかかわる本質的なこと」という意味が伝わらないように思います。それに、「本質が目に見えない」というのは、キツネが言うように、本当に簡単で当たり前のことです。しかし、「大切なことは目に見えない」

というのは、果たして当たり前のことなのかどうか、ちよつと疑問です。

それ以外にも、この作品にとって重要な言葉は、できるだけ和語にして、原意が伝わるように心がけたつもりです。また、何度も何度も繰り返される言葉についても、できるだけ同じ訳語になるよう、統一したつもりです。

そういった徹底は、全体に渡って、原文で“petit prince”と呼ばれた部分にしか〈王子〉というフレーズを使わない、というところにも現れています。ずっと〈王子〉と呼ぶのは、いささか童話的にすぎるのではないか、と私は思います。少なくとも、少年本人が自分が王子であると名乗ったわけではないし、操縦士は会話文で一度も「王子くん」と言いません。少なくとも地の文の最初のうちは、〈ぼく〉が気分を害したような、少年

に対してむかつきを覚えるような文脈で使われることがほとんどです。

この王子くんに少し気に入らないものを感じていた操縦士が、だんだん彼に心を開いていくのだとすれば、この〈王子〉という言葉が限定的に使われるのを、翻訳で消してしまう方がいいことだとは思えません。

最初からいきなり〈王子さま〉という、なんだかキラキラした登場人物が現れたのではないのです。なんだか不思議な子どもがひとり現れて、むかついたり、同情したり、いろいろな心の変化があつて、そしてクライマックスへと向かいます。心の細やかな変化を無視して、童話風に『星の王子さま』という固有名を与えることが、また地の文でも一貫してその名で呼び続けることが果たして最善なのかどうか、疑問に思わざるを得ま

せん。

一方で、“Le Petit Prince”を『星の王子さま』でなく、『小さな王子』のような題名にすることも、あまりいいように思えませんが。概して、多く出た新訳群は、どうも冠詞や代名詞に対して配慮されていないようがあります。もし“Le Petit Prince”の直訳が『小さな王子』というのであれば、冠詞の“Le”はどこへ行ったのでしょうか。それを直訳する必要はないのでしょうか？ それとも、その冠詞は不定冠詞でも、定冠詞でも、どちらでも構わないというのでしょうか？

もしこの作品が童話であり、どの登場人物も、彼は“Le petit prince”なる人物であるという統一的な態度を取っているのであれば、話は違います。個人の体験や感覚を超越して、様々な人によって語られる童話的世界では、それぞれの登場人物は語

り手や聞き手に関係なく、固有のものとなり、ただそこに登場するだけで唯一である資格を得て、定冠詞を有することができません。

しかし、実際この作品で“*petit prince*”に付くのは定冠詞のときもあれば、不定冠詞になることもあり、また無冠詞にもなります。そして何よりも大事なのは、この作品が操縦士という一人称の語り手による、追憶の物語であるということ。これは、誰によって語られてもいい童話ではなく、あるひとりの語り手による告白なのです。

さらに、定冠詞と不定冠詞のあり方は、この話のテーマに通ずるものがあります。不定冠詞がつく場合というのは、そのものが世の中にたくさんあって、そのどれでもいいからひとつを取り出したいときです。そのひとつは、ほかのたくさんと何の変

わりもありません。キツネの言葉を借りれば、“un renard”と
いったときのキツネは、「ほかのキツネ一〇まんびきと、なんの
かわりもない」わけで、どれでもいいのです。ありふれており、
そして特定されていないものに対して、不定冠詞が使われるわ
けです。しかし、語り手とそのキツネが何らかの関わりがある
場合、あるいは語り手と聞き手の間で、そのキツネと何からの
関わりがあつて、キツネが特別な一匹の個体として認識できる
とき、そのキツネは定冠詞を持った“le renard”となります。

それは、“le petit prince”の場合でも同じことです。へちいさ
な王子〈なんていう存在は、世界には五万と存在するかもしれま
せん。いくらでも存在の可能性がりますし、そのなかのどの
王子でもいいのであれば、“un petit prince”で構わないでしょ
う。また、誰にとつても同じひとつの王子が存在するのであれ

ば、最初から最後までずっと“le petit prince”でいいわけです。〈星の王子さま〉と呼ぶときも、その王子が星にいることがその存在根拠のようであり、誰と接しようが誰と出会おうがどうでもよくなります。ただ王子が星にいるという理由だけで、〈星の王子さま〉という唯一の存在が識別・認識できるからです。しかし、この作品を読めば、少年がそのような存在でないことは明らかです。

この“petit prince”に定冠詞がつくだけの関係が、操縦士と少年の間にあります。少年が星にいたから、操縦士にとって大事になったわけではありません。六年前、あるひとりの小さな王子が操縦士の前に現れ、その少年と操縦士はしばらく時をとりに過ぎします。つまり、操縦士は少年のために時間をなくすのです。そして、ふたりは絆を作ります。だからこそ、六年後

の操縦士は、その少年に定冠詞を付けることができますし、付けなければなりません。

語り手が、その少年と出会った時が過去に存在し、そのために「*le*」をつける。フランス語の話者には、その冠詞が当然のことであっても、日本語の話者にとっては違います。もし「星の王子さま」と訳したとき、その含意は、すっかり抜け落ちてしまふことになります。

語り手にとって、「星の王子さま」だから大切なのでなく、六年前のサハラ砂漠に下りたとき、「あのとき」に出会って一緒に過ごしたからこそ、少年はかけがえのない存在なのです。そのほかのどのときに出会えたかもしれない王子くんではなく、「あのとき」の王子くんが大事なのです。だから童話のように超越した時間を話すのではなく、追憶の話として、個人的な体験の

話として語られます。

そして、語り手から〈あのととき〉が語られると同時に、読み手はそれを追体験し、操縦士と同じようにその少年と関わりを持ちます。本を読む行為によつて時間をなくし、そのために少年が大切なものとなることもあるでしょう。そして、王子くんというのは、ほかの誰が読んだときでもなく、自分がこの本を読んだ〈あのととき〉の王子くんとなるはずです。

このように作品の根幹に関わってくる「*le*」という定冠詞を、訳題から落とすというのは、翻訳者としてどうしてもできません。ましてや、内藤氏の訳業に挑戦するのであれば、なおさらです。

内藤濯氏のご子息である内藤初穂氏は、このように語られています。

「せつかく新訳されるのですから、新しいタイトルを工夫してほしい。「新しき葡萄酒は新しき革袋へ」です。」

新訳ラッシュの前、各出版社に対して、内藤濯氏の創り出した〈星の王子さま〉というタイトルを使わないでほしいと主張されました。しかし結局、本のタイトルには著作権が発生しないということ、使うなら〈内藤濯の創案〉であることを附記してほしいというアナウンスにとどまることになります。

この翻訳では、内藤濯氏に敬意を持つて挑戦するという意味でも、〈星の王子さま〉というタイトルをあえて使いません。そもそも商業的理由によって、様々な翻訳が『星の王子さま』というタイトルに制約されるのであれば、翻訳の自由もおびや

かかされているのかもしれない。新しくかつ自由な“Le Petit Prince”を世に出すためにも、直訳の「あのときの王子くん」というタイトルを用いる次第です。

6 参考文献・サイト・謝辞

この翻訳を作るにあたり、以下の諸訳について、翻訳研究の側面から分析を行いました。その研究成果が翻訳に反映されています。また、それぞれの翻訳を、訳文作成後の誤訳チェックにも使用いたしました。各訳者様に、深く感謝申し上げます。

内藤濯 [訳] (1966) 『星の王子さま [改版]』 岩波書店

—— [訳] (2000) 『星の王子さま——オリジナル版』 岩

波書店

小島俊明〔訳〕(2005)『新訳 星の王子さま』中央公論新社

三野博史〔訳〕(2005)『星の王子さま』論創社

倉橋由美子〔訳〕(2005)『新訳 星の王子さま』宝島社

山崎庸一郎〔訳〕(2005)『小さな王子さま』みすず書房

池澤夏樹〔訳〕(2005)『星の王子さま』ハードカバー版』

集英社

川上勉、甘樂美登利〔訳〕(2005)『プチ・フランス 新訳

星の王子さま』グラフ社

藤田尊潮〔訳〕(2005)『小さな王子 新訳』星の王子さま』

八坂書房

辛酸なめ子〔訳〕(2005)『「新」訳 星の王子さま』コアマ

ガジン

石井洋二郎 [訳] (2005) 『星の王子さま』 筑摩書房

稲垣直樹 [訳] (2006) 『星の王子さま』 平凡社

河野万里子 [訳] (2006) 『星の王子さま』 新潮社

谷川かおる [訳] (2006) 『星の王子さま』 ポプラ社

野崎歓 [訳] (2006) 『ちいさな王子』 光文社

(以上、刊行年月日順)

さらに、原典の解釈に当たって、以下の研究書・関連書・サ
イトを参考にしました。同じく各著者様に、深く感謝申し上げ
ます。

院
稲垣直樹 (1992) 『サン＝テグジュペリ 人と思想』 清水書

—— (1993) 『サドから『星の王子さま』へ フランス小説と日本人』丸善

片木智年 (2005) 『星の王子さま☆学』慶應義塾大学出版会
加藤晴久 (2006) 『自分で訳す「星の王子さま」』三修社

小島俊明 (2000) 『改訂版 おとなのための星の王子さま
——サン・テックスを読みましたか』近代文芸社

内藤濯 (1971) 『未知の人への返書』中央公論社

—— (1971) 『星の王子とわたし』文藝春秋

—— (1976) 『落穂拾いの記』岩波書店

内藤初穂 (1984) 『童心の日記——序に代えて』『星の王子
パリ日記』(内藤濯 [著]) グラフ社

—— (2003) 『『星の王子さま』備忘録その一』『図書

2003.12』岩波書店

—— (2006) 『星の王子の影とかたちと』 筑摩書房

藤田尊潮 (2005) 『『星の王子さま』を読む』 八坂書房

水本弘文 (2002) 『『星の王子さま』の见えない世界』 大学
教育出版

三野博司 (2005) 『『星の王子さま』の謎』 論創社

柳沢淑枝 (2000) 『いっころで読む「星の王子さま」』 成甲書房

山崎庸一郎 (1984) 『星の王子さまの秘密』 彌生書房

—— [編] (1995) 『星の王子さまのはるかな旅』 求龍堂

—— (2000) 『『星の王子さま』のひと』 新潮社

RenardBleu (1999-2006) 『「星の王子さま」総覧』 Available
online at www.lepetitprince.net (accessed 2005-2006)

最後に、次の方々にあらためて感謝申しあげます。STORY-

TELLERBOOK の佐々木健さん、「星の王子さま」総覧の *Re-hardBleu* ゃん、*aozora blog* の *ag* さん、いろんなことを教えてくれたひとりの女の子、そしてこの半年間、なにかと支えになつてくれた友人たち。みなさま、本当にありがとうございます。しました。

この翻訳が、読者のみなさまの何かのお役に立つなら、これにまさる幸いはありません。

大久保ゆう

2006年10月24日

あの子の王子くん LE PETIT PRINCE

底本：Antoine de Saint-Exupery (1943) "Le Petit Prince"

上記の翻訳底本は、著作権が失効しています。なお、挿絵はレイナル&ヒッチコック社刊の初版第1刷（1943）より複製しました。

翻訳者：大久保ゆう

2006年5月3日～10月8日まで aozora blog に連載

2006年10月24日加筆修正

2008年3月5日微修正

2008年3月5日ファイル作成

青空文庫提供ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に提供されています。

※この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 2.1 Japan ライセンスの下でライセンスされています。この使用許諾条件を見るには、<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>をチェックするか、クリエイティブ・コモンズに郵便にてお問い合わせください。

住所は：559 Nathan Abbott Way, Stanford, California 94305, USA です。

上記のライセンスに従って、翻訳者に無断で自由に利用・複製・再配布することができます。

※翻訳者のホームページは、<http://www.alz.jp/221b/> にあります。作品・翻訳の最新情報やお問い合わせは、青空文庫ではなく、こちらにお願いします。